OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	ヴィシー政権下のフランス人民党　1942-1944年（2）
Author(s)	竹岡，敬温
Citation	大阪大学経済学. 2015, 64(4), p. 19-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56998
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ヴィシー政権下のフランス人民党　1942 － 1944 年（2）

竹　岡　敬　温[†]

2. ふたたび東部戦線へ

政権への展望は遠のいた。連合国軍が北アフリカに上陸し，その占領に成功して以後，多くのフランス国民は——1943 年 1 月前半に北部地区で実施された世論調査によれば——「イギリスびいき」で「ドイツ嫌い」に変わった。この世論調査は，フランス国民のすくなくとも 85 パーセントがドイツに敵対的であり，ドイツにたいするヴィシー政府の政策に反対であることを示していた[73)]。また，イタリア外相チアーノが，その『政治日記』のなかで，「フランス全体が，いまや，ドイツが戦争に負けるだろうと確信し，その日を待っている。ラヴァルは軽蔑されているが，しかし，実は，もっと恐ろしい人物がいるので，まだラヴァルのほうがましだとおもって我慢している。その人物とはドリオであり，みんながかれを卑俗なギャングのようにおもっている」と記している[74)]。チアーノの判断を信じれば，全体の 10 ないし 15 パーセントにしかすぎない「ドイツびいき」のなかにおいてさえも，フランス人民党は毛嫌いされていた。同党がかき立てていた恐れは，それほど激しかったということになろう。マルセル・デアの日記によれば，アベッツがリッベントロープの不興を買って以来，アッヘンバッハ参事官が支配していたドイツ大使館周辺の対独協力の小さな世界においても，ドリオはじゃま者扱いされていた[75)]。1942年12月6日，ヴァーグラム会館で開催されたフランス人民党全国評議会でおこなったスピーチで，ドリオは，ラヴァルが，対独協力主義政党，とりわけフランス人民党を解散させるために，ペタンから委任されたばかりの全権を使うのではないかとの恐れを表明した。各地区の集会でも，党の非合法状態への移行がありうることがほのめかされた[76)]。

1942 年 11 月 25 日，ヘルムート・クノッヘン大佐が親衛隊（SS）長官ヒムラーにフォサーティの訪問を受けたことを報告しているが，そのとき，フォサーティは，フランス人民党の財政について，負債が 600 万フランにのぼり，返済の見通しもなく，破局的な状態にあって，「党活動が近いうちに全面的に麻痺するのを覚悟しなければならない」と語ったという[77)]。事実，党内では，幹部が，党員たちにたいして，党の資産が減少し，もはや大集会の開催は不可能で，パンフレットやびらも制限することが必要だと警告していた[78)]。党の活動は，2，3 人の同一メンバーの演説家がリードする各地区の型にはまった少数の集会のみになり，幹部の集会

[†] 大阪大学名誉教授

73) ニュルンベルク文書館，現代ユダヤ関係資料センター，1943 年 2 月にドイツ政府に提出された文書，cit. par Dominique Rossignol, *Vichy et les francs-maçons. La liquidation des sociétés secrètes, 1940-1944*, J.-Cl. Lattès, Paris, 1981, pp. 177 - 181.

74) Galeazzo Ciano, *Journal politique, 1939-1943*, Ⅱ, Ed. La Presse française et étrangère, 1947, pp. 228 - 229.

75) *Journal de Marcel Déat*, 27 novembre, 8 décembre 1942, 17 janvier 1943 et passim.

76) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport des 16 décembre 1942 et 18 décembre 1942.

77) *Archives Nationales*, F^7 15145, dossier 3, pièce du 25 novembre 1942; J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp. 405 - 406.

78) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapport du 22 novembre 1942 et divers comptes rendus de réunions de sections.

も気詰まりな雰囲気のなかでおこなわれ，大量の離党が起こり，パリ地域連合の書記も離党するというような，深刻な事態も起こった。警察報告によれば，1942年11月下旬にはパリ市のフランス人民党の党員数は2,700人であったが，1943年2月半ばには1,500人にまで減少したという。すなわち，この短い期間に，およそ45パーセントの党員が離党したのである。この時期，どうして，このような大量の離党が生じたのであろうか。その理由は，フランス人民党の党員たちに，同党の時代がすでに過ぎ，同党も戦前の多くの政党が最後には消滅したのと同一の運命をたどるのではないかという，確信にも似た気持を抱かせたことに起因していたのではなかったろうか。かれらは，なぜドリオがラヴァルにかたくなに反対するのか，なぜ党にとって致命的になるかもしれない孤立状態に党を追いやろうとするのか，理解できなかった。政治局では，フォサーティ，フェルナン・キャノビオ（全国組織担当責任者），ブーグラたちが，そしてバルテレミーも，柔軟路線の支持者であったが，これに反して，マルシャル，デュティユール，シキャールあるいはポール・チュロット（宣伝担当）らは，ドリオに盲目的に追随した[79]。

フランス人民党の党員たちのなかには，マルセル・デアが国民革命戦線（Front Révolutionnaire National）の設立とともに開始したキャンペーンに関心を向けるものがすくなくなかった。既述したように，デアは，1942年7月12日の国家人民連合の全国評議会の機会に，単一政党としての国民革命戦線（FRN）のアイディアを発表したのであったが，それは，すべての対独協力主義者をひとつの集団に結集させようとする政治連合であった。これにたいして，ドリオは，フランス人民党以外の単一政党のあらたな試みを断固として拒否したが，このデアの試みは，ドイツ大使館に熱心に支持され，フランス人民党の活動を妨害しようとしていたラヴァルに励まされて，1942年末には軌道に乗ったかとおもわれた。1943年初頭には，アンリ・バルベが国民革命戦線（FRN）の書記長となり，かれは，国民革命戦線（FRN）が正式に発足した2月22日のプレイエル会館での集会，4月11日の冬季競輪場での大集会など，パリでいくつかの示威集会を成功させた。すべての対独協力派の指導者のうちただひとり，ドリオだけがこの組織に加盟するのを拒否しつづけた。ドリオは，国民革命戦線（FRN）のなかに，ライヴァルのデアがかれに向けた「大量破壊兵器」のにおいを嗅ぎつけていたのである。ドリオにたいするアンリ・バルベの懇願も，なんの役にも立たなかった。フランス人民党は，党員数は最大ではなかったとしても，すくなくとも，もっともよく組織された，もっとも戦闘的な政党であった。しかし，いまや，同党はきわめて困難な局面に置かれたのである[80]。

そのうえ，デアが盛んな活動を展開していたときに，ドリオはかれ自身の党にとくに興味を示さず，幹部の集会にたいしてさえも無関心であるかのようにおもわれた。かれになにが起こったのか。その頃，かれは，シャンゼリゼ大通りにあるキャバレー，ル・リドの若いダンサー，ジネット・ガルシアとの愛人関係に夢中になっていたのである。2人が知り合ったのは1942年2月のことであり，当時，彼女はまだ20歳になっていなかった。その数か月後，ドリオはジネットにダンサーをやめさせ，フランス人民党の経理主任エミール・マッソンがかれの名前で借り，マッソン自身が家賃を支払って

[79] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 336, dossier《PPF. Rapports d'ensemble》. その他，1942年12月末から1943年3月まで定期的に送られてきたきわめて多数の報告。

[80] V. Barthélemy, *op. cit.*, pp. 342-343, 347, 349, 351; Saint-Paulien, *op. cit.*, pp. 378-379; D. Wolf, *op. cit.*, p. 386, 平瀬・吉田訳, p. 375.

いたアパルトマンに，彼女を住まわせていた。ドリオはジネットに毎月の生活費をあたえ，ジネットは人目につかないように暮らし，愛人のドリオの訪問を待つだけの生活を送っていた。しかしながら，ドリオが政治的性格のレセプションを催すときには，ジネットはしばしばそれに出席し，招待客がドリオと懇意でないときには，ドリオの個人秘書として通していた[81]。対独協力者たちの小さな世界では，ジネットのことはよく知られていた。パリ警視総監ビュシエールは，デアにその「秘密」を打ち明けているが，かれの部下たちは，その報告のなかで，フランス人民党の党内では，この件でドリオが容赦なく批判され，そのため，かれの権威も威信もひどく落ちていると指摘している[82]。

しかし，ドリオは愛人のもとに通うだけの生活に満足するような男ではもとよりなかった。1943 年 2 月 2 日，スターリングラードで，フォン・パウルス元帥の率いるドイツの軍団が降伏したその日，ドリオはドイツ国防軍にふたたび東部戦線に出発したいと申し出た。それは，すべての対独協力主義者にたいする挑戦であった。ヴィクトル・バルテレミーは「フランス人民党の党首には，このように，フランス義勇軍団（LVF）に復帰しなければならない義務は，なにもなかった。かれは第 1 回派遣部隊とともに出発し，数か月間も前線に，しばしば第一線に滞在したのである。かれは，そのようにしたたったひとりの党首であった・・・わたしは，心のなかで，何度も問いかけたが，答をみいだすことはできなかった。東部戦線へのかれの出発は，難局打開のために思い切って打った積極策なのだろうか，あるいは破れかぶれの前進策なのだろうか・・・それはおそらく運命にたいする挑戦――いや，むしろ挑発というべきだろう――のようなものではないだろうか」と書いている[83]。しかし，フランス人民党の幹部たちが期待したドリオの出発の宣伝効果を減殺しようとおもっていた，ドイツ大使館とラヴァルの圧力のもとで，ドイツ軍最高司令部は，ドリオにフランス義勇軍団（LVF）に復帰する許可をあたえるまで，1 か月半も待たせた。

1943 年 3 月 21 日，ミュチュアリテ会館での集会のとき，ドリオは「パリの民衆に別れを告げ」，「わたしは，この困難な，きわめて憂慮すべきときにこそ，ボルシェヴィキの野蛮人たちとの戦いに参加し，かれらと戦いつづけている人びととの完全な連帯を示したいとおもったのです」，「ボルシェヴィキ革命は歴史上最大の詐欺です」，「わたしはわたしの国とヨーロッパのために尽くすという確信を抱いて出発します」と言明した。これにたいして，「フランス民兵団」の書記長ジョゼフ・ダルナンが，「武器を手に，ボルシェヴィズムにたいするヨーロッパの戦いにおいて，フランス国旗の名誉を守ろうとする戦士たちの勇気」に敬意を表した。

1943 年 3 月 25 日，ドリオはふたたび東部戦線へ出発した。翌日，ヴィクトル・バルテレミーは党首ドリオの 2 通の――1 通はヒトラー宛ての，他の 1 通は，この手紙のヒトラーへの送付を依頼したリッベントロープ宛ての――手紙をドイツ大使館に届けた。ヒトラーに宛てた手紙では，ドリオは，「ドイツ帝国宰相」に，東部戦線に向かう許可をあたえられた「喜び」を表現し，「わたしは，わたしの同国人たちに，主要な危険は東方に存在することを示し，東部戦線で戦うことによって，すべてのフランス人に，ドイツの軍隊とその同盟軍はたんにドイツのために戦っているのではなくて，全ヨーロッパのために，したがってフランスのためにも戦っているのであることを理解させたかったのです」と強調している。ついで，かれはフラン

81) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Ginetta Garcia.

82) *Journal de Marcel Déat*, 17 janvier 1943 ; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 336, rapport du 15 janvier 1943 ; J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp. 407-408.

83) V. Barthélemy, *op. cit.*, pp. 344-345.

ス人民党を熱心に擁護し，きわめて深刻な国内情勢と「ユダヤ人＝共産主義者の陰謀の驚くべき組織網の存在にもかかわらず，この党の力のおかげで，わたしは出発できるのです」といい，そして，「わたしの党は，いまや，悲劇的な事態に正面から立ち向かい，北アフリカでおこなわれた致命的で恥ずべき行為を国内でも再現しようと望んでいる人びとにたいしては，情け容赦のない態度を示す決意をしています。だからこそ，ドイツ帝国宰相閣下，わたしは，このフランス義勇軍団（LVF）とともにふたたび戦いに向かうことができるのです。義勇軍団戦士の90パーセントがフランス人民党の党員であり，義勇軍団の150人の死者のうち100人はフランス人民党の党員であり，かれらはドイツの同志たちとともに華々しく戦い，命を投げ出したのです。わたしは，この二重に実り多い戦いに参加したのは，わたしの国の名誉のためであると考えています。なぜ，二重に実り多いのかといいますと，それは，この戦いが人類の文明を救うと同時に，同一の神聖な大義のために，ドイツの血とフランスの血を戦場で混ざり合わせるからです。これまでは，あまりにもしばしば，馬鹿な罪人どもの過ちによって，両国の血が無駄に流されてきたではありませんか」とのべていた。

ドリオの手紙はただちにベルリンに送られ，手紙の文章は電報ででも伝えられた。しかしながら，ヒトラーにたいしてドリオがロシア戦線における独仏の運命共同体を喚起したことは，現実には，なんの成果もなかった。ペタンとラヴァルにたいするヒトラーの支持は，変わらなかった。しかし，フランス義勇軍団（LVF）のなかでのフランス人民党の主導権を堂々と主張したことは，ドイツの外交官たちの世界で，同党にたいするかれらの敬意をいくらかは強める効果はあったであろう[84]。

1943年4月15日，ドリオは，友人のジャン・ル・カン宛てに，つぎのような手紙を出している。「20日間の旅のあと，ようやく前線に着いた。敵は1,500メートルの彼方にいるが，敵味方は洪水で水位のあがった川によって分け隔てられている・・・しかし，春がすこしづつ到来するとともに，軍事作戦にそなえて塹壕を設営しなければならず，僕は土木工事の現場監督か技師のようなことをしている・・・」しかし，友人への手紙にドリオは書いていなかったが，このとき，フランス義勇軍団（LVF）は，士気が低下して，まったくの無秩序状態にあり，軍事的機能は明白に無力化し，ドイツ国防軍の不信の的になっていたのである。義勇兵の大多数は，失業を回避したり，個人的な困難から逃げ出したり，違法行為を隠したりするためだけに志願していたのである。

フランス義勇軍団（LVF）の大隊長代行ジャン・グザヴィエ・シモーニ指揮官が，陸軍省政務次官ブリドゥー将軍に，つぎのように報告している。「半数をはるかに越える，大隊のすべての階級の大多数のメンバーは，要するに，自分たちがロシアにいることに，フランスにいるよりもよい食物が食べられる機会しかみようとはせず，また，かれらの幹部の無能とドイツ軍連絡参謀本部〔ドイツ国防軍と，その指揮下にあるさまざまな国籍の軍隊とのあいだの連絡をとる機関〕の暗黙の了解のおかげで，快適な毎日が送れるある程度独立した生活，女やウォッカがたっぷりあてがわれ，のんびりした生活のできる機会しかみようとはしていません[85]。」このような状態では，フランス義勇軍団（LVF）

[84] *Archives Nationales*, W Ⅲ 396 (Archive de Berlin), bordereau 4152, pièce 21; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 339, rapports de police, 12 et 18 mars 1943; D. Wolf, *op. cit.*, pp.476-477, 平瀬・吉田訳, pp.423-425; J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp.408-409; Ph. Burrin, *op. cit.*, pp.438-439.

[85] *Archives Nationales*, W Ⅲ 110, sous-dossier 13,《Rapport sur la situation de la LVF dans l'EST》, 1943年6月24日，ヴェルサイユで作成された報告。Krisztián Bene, *La collaboration militaire française dans la Seconde Guerre mondiale*, Editions Codex, Paris, 2012, p.67.

の軍事的効率は，きわめて悪かったであろう。義勇軍団の兵士の 40 パーセントが武器を効果的に使用することができず，集団別部隊移動，カムフラージュ，地形利用などにかんするいかなる基礎知識ももってはいなかった，とシモーニは書いている。士官や下士官も経験を欠いていた。要するに，フランス義勇軍団（LVF）は戦うことなどできない，ロシア人パルチザンによる鉄道線路の破壊にたいして保線業務をかろうじておこなうことができるだけの，実際的価値のない民兵でしかないと，ドイツ国防軍によってさんざん嘲笑されたのであった[86)]。

このように，前線では，義勇軍兵士は軽視され，見捨てられたかのような存在であった。それにもかかわらず，他方，パリでは，フランス義勇軍団（LVF）の組織は肥満化し，しだいに多額の金が動かされるようになっていた。志願兵ひとりあたりの平均支出は，1941 年には 7,100 フランであったが，1943 年には 12 万フランに，1944 年には 24 万 4,000 フランに急上昇した[87)]。ところが，兵士のために集められたコーヒー，タバコ等の現物の寄贈品は，すべて，志願兵の友人たちにあたえられたり闇市に流されたりした。1941 年と 1942 年のクリスマスの祝日や 8 月 27 日の義勇軍団の記念日のために募られた慰問袋は，目的地にはまったく届かなかった[88)]。それにくわえて，軍の叙勲は戦闘員自身よりも参謀本部や情報部のスタッフに多く割り当てられた。シモーニ指揮官は，ドイツ軍連絡参謀長に送った怒りの手紙のなかで，かれが提出した 20 人の叙勲推挙者のリストのうち，4 人しか取り上げられなかったことに苦情をのべている[89)]。

ブリドゥー将軍への報告のなかで，シモーニは，「人はその制服通りの人間になる」というナポレオンの言葉を引用し，フランス義勇軍団（LVF）の兵士たちは，すっかりドイツ人になってしまっていて，フランスでの休暇のときには家族から冷ややかにあしらわれ，かれらの大部分は，家族から受ける敵意のために，家族と仲たがいし，その結果，かれらは，心のなかに，フランス社会から打ち捨てられ拒否されたという感情を抱くにようなっていると書いていて，かれらにフランス義勇軍団（LVF）に参加するのを止めさせ，休戦監視軍〔休戦協定の結果，フランスにもつことを許された 10 万の陸軍兵力〕の構成員をフランス義勇軍団（LVF）の募集源とすべきであろうとのべている。そして，「もしフランス政府がドイツの敵との戦いにフランスが参加するのが有益であると判断するならば，フランス軍の制服を着用し，できるかぎりフランス製の武器を装備し，すべてがフランスの将軍と連隊長によって指揮され，元フランス軍の部隊で構成されたフランス軍旅団を創設するというかたちでおこなうのが，絶対に必要である」と結論している[90)]。

したがって，ドリオが前線に到着したとき，フランス義勇軍団（LVF）はほとんど無秩序状態のさなかにあったのである。しかし，かれは，ル・カン宛ての手紙のなかでは，義勇軍団の混乱についてはいっさい触れず，「妻の面倒を少々みてくれる」よう頼むとともに，つぎのように，かれの日常生活をくわしく語っている。「僕の生活はどうだって？兵士の生活，パルチザンとの戦いに身を投じた歩兵の生活だよ。探索しているときにはまったく姿をみせず，予期しないときに，突然あらわれて，僕らを襲撃してくる敵を求めての，ロシアの森のなかでの斥候や長時間の偵察だよ・・・それは僕

86) *Archives Nationales*, W Ⅲ 110, sous-dossier 13,《Résumé des principales opérations du 1/638^e RIF du 22 décembre 1942 au 11 mai 1949, sous le commandement du chef de bataillon Simoni》; J.-P. Brunet, *op. cit.*, p.410.

87) J. Delarue, *op. cit.*, p.223.

88) J. Delarue, *ibid.*, pp.224-225.

89) *Archives Nationales*, 3 W 212, pièce 24, lettre de Simoni du 23 avril 1943.

90) *Archives Nationales*, W Ⅲ 110, sous-dossier 13,《Rapport sur la situation de la LVF dans l'Est》, op.cit.; J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp.411-412; K. Bene, *op. cit.*, p.139.

を25歳も若返らせ，かつてアルバニアでおこなった戦争に僕を引き戻す。僕は，武器と弾薬を携行しながら歩くことをあらためて学んだよ。薬莢は200筒ほど持ち運ばなければならない。森のなかで道に迷ってしまったら，輜重隊に弾薬を補給してもらうことはまったく期待できないからね・・・僕らは，一昨夜，深夜から朝の7時まで，42キロメートルの大行軍をした。昨夜は，深夜から朝の10時まで，25キロメートル歩いたよ。残りの時間は，偵察隊の将校として，ロシア語で捕虜を締めあげているよ[91)]。」捕虜を尋問するときには，かつてコミンテルンで積んだロシア語の修業が役立つことが分かったのである。

パルチザンとの戦いは正面衝突の戦争に劣らず困難であり，多数の人命が奪われた。1943年8月8日，休暇でフランスに帰国したとき，冬季競輪場でおこなった演説で，ドリオはつぎのように語っている。「わたしが前線にいるあいだ，わたしの大隊に起こったのは，以下のようなことです。6月9日，森の奥の電話線を修理しにいった義勇兵のわれわれの同志15人が命を落としました。かれらはすっ裸にされ，銃床でなぐられて息の根をとめられていました。6月18日，ふたたび衝突があり，あらたに5人が戦死しました。その翌日には，2人の負傷兵のとどめを刺すのに使われた斧，人肉の断片と髪の毛の切れ端がまだついている血まみれの斧がみつかりました。7月9日には，3人の志願兵がかれらの宿営地から不用意に離れ，数時間後には，かれらのうちのひとりが銃床でなぐられ，頭蓋骨を割られて，絶命しているのがみつかりました。7月12日には，さらに5人が殺されました[92)]。」

これにたいして，第2次世界大戦後，さまざまな証言にもとづいて作成されたいくつかの警察報告は「この2度目の東部戦線滞在中のドリオのもっとも重要な活動は・・・宣伝のための写真を撮らせること」にあったようだとのべ，反パルチザン作戦のときには，ドリオはかれのコックたちとともに移動炊事車を奪おうとしていたのであろう，とからかっている[93)]。宣伝写真を撮るためだったという当てこすりは，ドリオが，ロベール・ブラジャック[94)]と一緒に，立

91) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, Dossier le Can, chemise Correspondance Doriot/Le Can, lettre du 4 juillet 1943.

92) Jacque Doriot, *Le destin français*, brochure de 8 pages, 1943.

93) J. Delarue, *op. cit.*, p.211.

94) ロベール・ブラジャック，著作家，ジャーナリスト。1909年3月31日生まれ，1928年にエコル・ノルマル・シュペリウールに入学し，22歳のとき，『アクショヨン・フランセーズ』紙で文学批評を担当。1936年2月6日の極右諸同盟による下院襲撃事件に影響を受け，1936年6月以来，右翼週刊紙『ジュ・シュイ・パルトゥ』の定期的寄稿家となり，1937年6月，同紙の編集主幹となる。
1939年の開戦後，動員され，1940年にドイツ軍の捕虜となったが，1941年4月に釈放されてフランスに帰国し，『ジュ・シュイ・パルトゥー』紙に復帰した。その後，同紙の1941年4月25日号から1943年8月13日号まで，編集主幹として社説を執筆，ソ連のボルシェヴィズムとアメリカの資本主義という2つの全体主義的物質主義の膨張からヨーロッパを守るためには，ドイツとフランスとの協調関係を確立することが必要だと主張し，ヴィシー政府を支持して，対独協力を推進しようとした。しかしながら，1943年8月27日に公表した最後の論文で，今後，対独協力をやめると発表した。1942年11月8日，連合国軍が仏領北アフリカに上陸し，さらに，ロシア戦線でドイツ軍の敗走が報じられた時点で，ブラジャックは，もはやドイツの勝利はありえないと判断したのであった。1941年4月にフランスに帰還してから，対独協力者として活動したのは，1年半ほどにすぎなかった。
ブラジャックは，ファシズムをどう考えていたのか。かれにとっては，ファシズムは政治思想などではなく，ましてや，経済学の学説などでもなかった。ファシズムについて，かれはつぎのように書いている。「ファシズムに敵対する者たちは，ファシズムがもたらすこの喜びを理解できない・・・フランス・ファシズムとは，ひとつの精神なのだ・・・この精神は，階級的偏見をはじめ，あらゆる偏見を排除する。これは友愛の精神である。わたしたちは，この精神を，すべてのフランス国民を結びつける友愛の精神にまで高めたいと願ったのである。」Robert Brasillach, *Notre Avant-Guerre*, Plon, Paris, 1941; Robert Brasillach, *Ecrit à Fresnes*, Les Sept Couleurs, Paris, 1955, 高井道夫訳『われらの戦前，フレーヌ獄中の手記』国書刊行会，1999年，pp.250-251, 419-420.
1944年8月，連合国軍がパリにはいったとき，ブラ

派な軍服を着て，戦車の砲身のうえでポーズをとっている写真のことをいっているのであろうが，ブラジャックが，その友人のクロード・ジャンテとともに，1943 年 6 月に，フランス義勇軍団（LVF）を訪問したのは，フェルナン・ド・ブリノン（パリにおけるヴィシー政府代表）に伴われてであった。ブラジャックとジャンテは，このときの旅行についてマルセル・デアに話したようであり，デアはそれをつぎのように日記に書きとめている。「かれらが白状したところによれば，ドリオは，前線から遠く離れた“パルチザン”地帯で，イスバ〔手近かにある木材で作ったロシア農村の校倉式家屋〕に住み込み，だれにも邪魔されずにセックスができるしかるべき女をかこって，ぬくぬくと暮らしているとのことだ[95)]。」このような話を聞いて，まじめで性的に潔癖な教授デアは，憤りで息が詰まったことであろう。

しかし，このような戦後の警察報告やデアの日記の文章――ブラジャックとジャンテは，謹厳な哲学の教授をからかったのではなかろうか――は正確ではないとおもわれ，東部戦線でドリオが実際に禁欲的な兵士として生活したのは，確かだったようである。また，ドリオがいかなる危険にも遭遇せず，快適な時を過ごしていたと主張するのも，正しくはないとおもわれる。フランス義勇軍団（LVF）の指揮官のひとりジャン・バソンピエール大尉が，戦後の 1946 年 12 月，国家警察によって聴取されたとき，「志願兵の職務が現役軍の兵士の職務と同一ではなかったとしても，しかしながら，わたしは，志願兵がみずからすすんで危険な任務を実行するのを，2 度も，この目でみたと申し上げねばなりません」と証言している[96)]。また，戦前，フランス人民党の集会整理係をつとめていたエリック・ラバ伍長が語っているつぎのような話も，否定されるべきではないであろう。かれによれば，1943 年 5 月，致命傷を負った一曹長をみつけだすために，70 人の兵士からなる捜査隊が組織された。ドリオは，それに参加することを申し出た。「ドリオの申し出は，フランス人民党の党首である重要人物をすべての危険から保護せよという厳命を受けていた，指揮官を感激させるためではありませんでした。ドリオはそのような命令には耳を貸さず，かれの最下位の部下と同じだけの危険を冒すことを要求したのです。ドリオは，その巨像のような背丈が高くそびえていた先頭グループのなかにいました。」探索の結果，曹長の遺体はみつかったが，それは，まさしく，ドリオが指揮をとっていた先頭グループが，パルチザンの移動炊事車を奪い取った遠征からの帰路においてであった[97)]。

1942 年 1 月にドリオは 2 級鉄十字章を受けていたが，1943 年 12 月 1 日には，ドイツ国防軍の第 9 歩兵師団を指揮していたオシュマン将軍が，さらに，ドリオに 1 級鉄十字章を授与している。ドリオの勇敢さをほめたたえたスピーチのなかで，オシュマンは「あなたは，フランス義勇軍団（LVF）の創立者である政治家たちのなかでただひとり，ドイツ軍のなかで，身をもって，われわれの共通の敵ボルシェヴィズムとの戦いに参加されました・・・しかも，フランス義勇軍団（LVF）の兵士たちの大部分は，あなたの党の党員たちの隊列から募集されたものであります」といったのち，高ぶった調子で，「この不吉な大国にたいする驚異的な戦いのなかで，ひとつに統合したヨーロッパの輝か

ジャックはフランスを去ることを拒否し，地下に潜伏したが，かれの身代わりになって逮捕された母親を釈放してもらうために，パリ警視庁に自首した。1945 年 1 月 19 日，高等法院でのわずか 1 回の公判で死刑の判決が下され，多数の著作家たちの助命嘆願にもかかわらず，銃殺刑に処せられた。

95) *Journal de Marcel Déat*, 23 juin 1943.

96) *Archives Nationales*, F^{7} 15300, Dossier Bassompirre, 5^{e} audition, 5 décembre 1946.

97) Eric Labat, *Les places étaient chères*, La Table Ronde, Paris, 1969, pp. 147-148.

しい未来のために，われら２大国の国民が協力しているのです」と語った[98]。

しかしながら，フランス義勇軍団（LVF）の再編成について，ヴィシー政府の政治代表（ジャック・ブノワ・メシャン）および軍事代表（ギャリー元帥）とドイツ占領軍当局とのあいだで，果てしない話し合いがおこなわれた結果，ヴィシー政府は，フランス義勇軍団（LVF）を吸収して，ヴィシー政府に従属する「３色旗軍団」を創設することを交渉相手に了承させたかにおもわれた。実際に，1942年７月12日の法律によって，３色旗軍団の創設が決定され，ブノワ・メシャン，コスタンティーニ，ダルナン，デア，シモン・サビアーニらとともに，ドリオも同軍団の中央委員会のメンバーに任命された。ヴィシー政府は，各知事宛てに，同軍団に志願する休戦フランス軍の軍人全員にたいしてすべての権利，俸給，年金，勲章等を政府が保証することを強調した通達を送り，募集事務を助けるようせきたてた。しかし，３色旗軍団を正規軍の復活とみなしたドイツ占領軍は，同軍団の創設を了承してはいず，結局，ラヴァルは，12月28日，３色旗軍団を解散する法律を公布せざるをえなかった[99]。

けれども，ラヴァルは全面的には引き下がらず，1943年２月11日の法律によって，フランス義勇軍団（LVF）が国家にとって有用であると宣言した。そのうえ，かれは，1943年７月１日の国防省事務総局からの各知事宛て通達によって，「首相は，反ボルシェヴィズム・フランス義勇軍団（LVF）にとっては，休戦フランス軍の解散した組織出身のすべての階級の志願兵をできるだけ早く募集することが，政治的にきわめて重要であると考える」ことを正式に通告した。しかし，集めるべき兵士の数は5,000人と決められていたにもかかわらず，徴兵キャンペーンは，結局，大失敗に終わり，徴兵キャンペーンが開始された１か月後，わずかに40人ばかりの軍人しか志願しなかった[100]。

フランス義勇軍団（LVF）にたいするヴィシー政府の責任は，パリにおけるヴィシー政府代表フェルナン・ド・ブリノンが，1943年６月に，義勇軍団中央委員会委員長として，東部戦線を訪れた旅行によって示された。アベッツに代わってドイツ大使の職務を担当していたシュライヤーの要請もあって，ド・ブリノンは，出発前に，ラヴァルの仲介によって，ペタンから，義勇軍団兵士に共感を示した文章を手に入れようと努力した。しかし，結局，その努力は成功せず，東部戦線でド・ブリノンが発表した声明は，つぎのように，間接的な表現を用いざるをえなかった。「最近わたしがヴィシーを訪問したとき，元帥と長時間話しを交わしました。元帥は，義勇軍団の兵士諸君が，ボルシェヴィズムと戦うことによって，フランスの役に立っていると熱心に強調されました[101]。」義勇軍団を訪問――デアは，そのなかにド・ブリノンとドリオとの共謀を見抜いたのであった[102]が――する途中で，ド・ブリノンはドリオに戦功十字章を手渡した。そして，ドリオは，既述した８月８日の冬季競輪場での演説の最後に「アフリカと本国での数々の裏切りがおこなわれたあと，義勇軍団が東部戦線で守ってきたのは，フランスの軍事的名誉のすべてであります」，「フランス政府は，ド・ブリノン氏の最近の訪問によって，われわれの努力を支持していることを示そうと望んだのであります」とつけくわえたのであった[103]。

フランス義勇軍団（LVF）にたいするドリオ

[98] *Cahiers de l'Emancipation nationale*, novembre 1943-avril 1944, p.101 sq. cit. par D. Wolf, *op. cit.*, p.480, 平瀬・吉田訳, pp.428-429.

[99] 渡辺前掲書, pp.156-157.

[100] *Archives Nationales*, 3 W 212, Ⅲ 2A2, pièces 11 à 15.

[101] Archives Nationales, W Ⅲ 110, sous-dossier 13, coupure du *Cri du Peuple* du 8 juin 1943.

[102] *Journal de Marcel Déat*, 6 et 19 juin 1943.

[103] J. Doriot, *Le destin français, op. cit.*, p.6; *Le Cri du Peuple*, 3 juillet 1943.

の影響力は，ドイツ国防軍によって試みられた非政治化作戦にもかかわらず，義勇軍団にたいする革命的社会運動（MSR）の影響の跡がほとんどみられなくなっていただけに，そして，義勇軍団の新しい幹部たちがドリオにたいして共感を表明していただけに[104]，きわめて強くなっていた。こうして，ドリオは，フランス義勇軍団（LVF）にたいする影響力をつうじて，比類のない道具を，かれに政権への道を開くかもしれない道具を所有することができたのであった[105]。

しかし，ドリオが東部戦線にいるあいだ，フランスでは，フランス人民党は党首の不在で苦しんでいた。1943 年 5 月初めには，地方の常設事務所を増加させたにもかかわらず，党員数は増加せず，反対に減少した。地区集会には人は集まらず，募金は以前の状態には戻らず，7 月初めには，パリ地域の党員数はわずか 2,000 人足らずにすぎなかった[106]。党の弱体化は，多くの示威運動の失敗によっても確認される。5 月 10 日，制服を着用したフランス人民党の数人の党員が，ピラミッド広場（パリ 1 区）のジャンヌ・ダルク像の足下に，「イギリス軍を追い払ったジャンヌ・ダルクに，フランス人民党とフランス人民党青年部が捧げる」という碑文を添えた 2 つの花束を置いたが，2 つの花束はパリ市警の警官によってすぐさま取りのけられた。

6 月 2 日には，前年の 6 月 2 日にパリで殺された『人民の叫び』紙の編集主幹アルベール・クレマンと，同じ日，フランス義勇軍団（LVF）に参加してロシアで戦死したフランソワ・サビアーニ[107]（シモン・サビアーニの息子）の一周忌にあたるこの日，フランス人民党指導部は党の死者の追悼式を挙げた。この年の初め以来，フランス人民党にたいするテロ行為が再燃し，ピエールフィット市長レーモン・ディールやヴィエンヌ県連書記で医師のゲランら，多数の党員や幹部の命が奪われたので，以後，毎年 6 月 2 日を党の死者の追悼の日と決定することによって，党指導部は党員たちの気持を引き締めようとしたのであった。

6 月 1 日から 2 日にかけての夜，ピラミッド街の「党の家」（党本部）の大ホールに装飾の施された棺台が設置され，幹部たちが代わる代わる死者の通夜をした。昼間には，若干の党員と，マルセル・デアやアルフォンス・ド・シャトーブリアン（1940 年 7 月 11 日にパリで創刊された対独協力主義の最初の週刊紙『ラ・ジェルブ』の主宰者で著作家）を含む対独協力派の重要人物たちが，棺台の前で身をかがめ，花束をたむけた。党の各地区支部はその地区にある教会でミサをとりおこない，党員たちは党の制服を着てそれに参列した。しかし，警察の集めた情報は，この追悼ミサという示威運動が失敗であったことをあきらかにしている。すなわち，ミサの参列者数はパリ 2 区のノートルダム・デ・ヴィクトワール教会では党員 12 人ばかり，サン・ヴァンサン・ド・ポール教会（パリ 10 区）では 17 人，ピエールフィット・シュル・セーヌ市（セーヌ県）では 12 人にすぎず，

---

[104] 1943 年 10 月 1 日に義勇軍団の指揮をとりにやってきた，エドガール・ピュヨー大佐の例がそうであった。1944 年 10 月の一警察報告によれば，ピュヨー大佐はドリオの庇護下にあり，ドリオは，かれが政権を取ったときには，ピュヨーを陸相に任命すると約束していたという。また，ドリオは，フランス義勇軍団（LVF）の文民局長で「フランス義勇軍団（LVF）友の会」をピュイザール将軍，在郷軍人協会会長のセルヴァン中尉，そして，少佐に昇進してパリ勤務になるまえに第 3 大隊を指揮していたドメシーヌ大尉らを頼りにすることができた。*Archives Nationales*, W Ⅲ 110, sous-dossier 13, pièce 4, rapport de l’inspecteur Valentini.

[105] J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp. 415 - 417.

[106] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 336 の大量の警察報告。

[107] フランソワ・サビアーニは，18 歳のとき，休戦協定調印後の 1940 年 7 月，イギリスに渡ってド・ゴールと合流しようとしたが失敗し，父親に厳しく説教され，翌年，フランス義勇軍団（LVF）に加わって東部戦線に出発，ロシアで戦死した。

参列者数が最高を記録したのはパリ８区のサン・フィリップ・デュ・ルール教会で，それでも50人ほどにすぎなかった[108]。フランス人民党の衰退は地方でもあきらかであり，その傾向は，その後，フランス解放の日まで続くことになる。すなわち，アルプ・マリティム県の党員数は，1942年12月には715人を数えたが，1944年４－５月には454人でしかなく，同じ期間に，コート・ドール県では168人から40人に，ヴィエンヌ県では300人から105人に減少している[109]。

結党以後，政治局がしだいに拡大され，そのメンバーがあまりに多くなっていたので，ドリオは，東部戦線への２度目の出発まえに，政治局の改組を試み，党の指導を，ヴィクトル・バルテレミー書記長のまわりにシモン・サビアーニ，ジャン・フォサーティ，アンリ・レーブル，アルベール・ブーグラ，マルセル・マルシャル，モーリス・イヴァン・シキャール，クリスチャン・ルジュウール，ロジェ・ヴォークランを集めた，９人のメンバーからなる「執行部」に委ねることにし，クロード・ジャンテ，ヴィクトル・アリギ，ジャック・ブノワ・メシャンを執行部の仕事に非公式に参加させた[110]。出発まえ，ドリオは，ドイツ大使館の同意をえたデアの主導によって1943年初めに設立された国民革命戦線（FRN）への参加について，他の対独協力主義政党との交渉を進めることをフォサーティにまかせたが，しかし，交渉の結果，各党の統合にまで，ましてや合併にまでいたることがないよう，明確な指示をあたえていた。フォサーティは，執行部の承認を受けて，ドイツ大使館が全力をあげて推進していた，各組織間の協力委員会の設立を受け入れるまではいってもよいと考えていたので，７月12日，ヴァーグラム会館で開催されたフランス人民党の集会の機会に，かれは他の対独協力諸党との協定が差し迫っていることを告げた。ところが，東部戦線にいたドリオは，ドイツ国防軍参謀本部の将校から，すべての対独協力主義運動の組織的統合の実現されるのが近いとの情報をえて，ひどく心配し，ただちに短期休暇の許可をえて，７月22日か23日に，不意にパリに帰ってきた。

ドリオは，フォサーティと党執行部をはげしく非難した。ヴィクトル・バルテレミーの表現によれば，ドリオは，スケープゴートを犠牲にしても，「党の一枚岩の団結を強化」しようと望んでいた。ドリオは，バルテレミーらがつよく反対したにもかかわらず，７月27日に集められた政治局メンバーの前で，フォサーティに自己批判を強い，かれが他の対独協力主義政党との交渉においてあまりに遠くまでいきすぎたことを認めさせた。さらに８月７日に開かれた全国評議会では，あらかじめ決定されたシナリオにしたがって，フォサーティは「事実」を認め，かれに託されたすべての責任をドリオの手に戻し，ドリオはフォサーティがかれの職務を放棄するのを承認した。それは，かつて共産主義者ドリオが強いられた自己批判や，共産党からバルベ＝セロール・グループが追放された事件のときと同様の光景の再現であり，このフォサーティにたいする自己批判の強制は，党首の全能と不謬性を再確認するのに役立っただけであった[111]。ドリオの突然の帰国は，こうして，フランス人民党とその他の対独協力主義組織とのあいだで始まっていた接近のための交渉をはっきり打ち切らせたのであった。

1943年８月８日，すなわち，フォサーティ

108) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 336 ; V. Barthélemy, *op. cit.*, pp. 349-350.

109) 第２次世界大戦史委員会（現在，現代史研究所）がおこなった県単位の調査からの抜粋。J.-P. Brunet, *op. cit.*, p. 418.

110) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 336 ; V. Barthélemy, *op. cit.*, pp. 345-346 ; Ph. Burrin, *op. cit.*, p. 439 ; J.-P. Brunet, *ibid.*, p. 418.

111) V. Barthélemy, *ibid.*, pp. 355-362 ; Saint-Paulien, *op. cit.*, pp. 384-387 ; D. Wolf, *op. cit.*, p. 387, 平瀬・吉田訳, p. 375 ; Ph. Burrin, *ibid.*, p. 442 ; J.-P. Brunet, *ibid.*, pp. 419-420.

がその職務を辞任させられた全国評議会開催の翌日，ドリオは冬期競輪場での大集会の議長を務めた。このときの演説がドリオがフランスの地でおこなった最後の演説となったが，かれの話の全体はボルシェヴィズムにたいする戦いを中心に展開された。かれは「ボルシェヴィズムの脅威を受けているのは，ドイツではなく，全ヨーロッパです」といい，フランス義勇軍団（LVF）の戦士たちは最後の勝利にたいする揺るがない確信をもち，「もし 6 月 22 日に，ヒトラーがわれわれの共通の敵と戦おうとする大胆な決心をしなかったならば，数百万の兵士，数万の飛行機と戦車を頼みとしたスターリンの突然の攻撃をはばむことは，だれにもできなかったでしょう。この天才的な対抗措置がヨーロッパを救ったのです」とのべた。そして，ドリオは，連合国軍はヨーロッパ文明の終わりを早めようとしているボルシェヴィズムの先駆けであるといい（それは，その後の歴史の経過からみれば，偏執狂的な妄想であったといわざるをえないが，しかし，当時には，まったくの現実感がなかったわけではなかった），「わたしは，かつて，人民戦線はすでに戦争であり，その戦争は敗北であるといいました・・・今日，わたしは，英米を支持することは，ボルシェヴィズムに門戸を開くことだといわざるをえません」と主張した[112)]。

最後に，ドリオは，聴衆にたいして，フランス人民党が「フランス衛兵隊（Gardes françaises）」というあらたな組織を編成しつつあることを紹介した。「フランス衛兵隊」という表現は，かつて王政時代にフランスの土地と世襲財産の警護にあたった精兵歩兵隊の名を踏襲したものであった。しかし，それは，不幸にも，別の運命を思い起こさせた。それが想起させたのは，ナチス党員を防衛する目的で結成された組織，ナチス突撃隊（SA）に加えてヒトラーの護衛部隊，ナチス親衛隊（SS）をおもわせる警備隊組織であった。「フランス衛兵隊」の役割は，本来，フランス人民党の集会を護衛することにあるはずであったが，しかし，連合国軍がフランス本土に上陸する見込みと共産党の蜂起の可能性が浮かびあがってくるにつれて，「フランス衛兵隊」の役割は，街頭戦の準備や党の不動産あるいは党員家族の保護に向けられるようになったのである[113)]。

冬季競輪場の集会のあと，「フランス衛兵隊」の最初の数大隊のはなばなしい行進がおこなわれた。フランス人民党の目的のひとつは，1943 年 1 月，南部地区で「戦士団保安隊（SOL）」から誕生し，北部地区にも定着しはじめた「フランス民兵団」の分遣隊数隊を――デアとダルナンとのあいだで実現した同盟の結果――7 月 18 日にパリのカルティエ・ラタンで行進させた，国家人民連合の示威運動に勝つことであった。制服を着用し，3 色旗を先頭に高く掲げた 12「大隊」がシャンゼリゼ大通り，リヴォリ街，ピラミッド街を分列行進し，その意味では，フランス人民党の示威運動は成功であった。各「大隊」はフランスの各地方の旗を――ドイツあるいはイタリア占領軍が掲げるのを反対したアルザス，ロレーヌ，コルシカ，サヴォワ，ニース，フランドル，ブルゴーニュなどのすべての地方の旗も――掲げていた。党政治局のメンバーによって先導された各「大隊」は，シャンゼリゼ大通りのロン・ポワン広場のすこし上方にとまっていた，オープンカーのなかに立つドリオの前を分列行進した。その隊員の数をフランス人民党の機関紙は 4,000 人と吹聴した（警察報告では 2,500 人）が，実際には，もっとすくなかったのではないかとおもわれる[114)]。しかし，この示威運動のささやかな

112) J. Doriot, *Le destin français, op. cit.*; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 336, rapports des 28, 31 juillet et 7 août 1943.

113) J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp. 420-421.

114) 各「大隊」は，実際には，5 人の隊員を 7 列に集めた 35 人で構成されていたが，しかし，列の間隔は軍

成功の結果，フランス人民党は，「フランス衛兵隊員６万人に制服を着せることができるように」，25万メートルの軍用ラシャの購入許可を工業生産相に願い出たのであった[115]。ともかくも，1944年には，「フランス衛兵隊」の隊員総数は，パリ地域だけで1,560人にのぼったのである[116]。

休暇期限の切れた８月26日，ドリオは友人たちに見送られ，ふたたびフランス義勇軍団（LVF）に合流するために，パリ東駅を出発した。旅行は，夏の暑さ，ベルリン空爆，ドイツの首都からの一部住民の脱出などで，困難をきわめた。８月31日，ドリオは，ル・カンに，ポーランドの訓練キャンプにようやく着いたことを知らせている。しかし，ドリオは東部戦線には長居しないと決心していたようであった。ル・カン宛ての手紙のなかで，ドリオは，「フランスの現状を考慮すれば，10月15日以後は義勇軍団にとどまることはむずかしいと僕がいったとき，たいへん驚ろかれた。軍の高官たちは，僕の早期の帰国が可能か疑っているようだ」と書いている。そして，フランス義勇軍団（LVF）従軍司祭マイヨール・ド・リュペの忠告にしたがって，エドガール・ピュヨー大佐が，ドリオなしで参謀部を構成したので，それにまた，陸軍省は義勇軍団の組織を手直ししようとしているようなので[117]，「だから，僕はここには長居できないのだ」と続けている[118]。

しかし，実際には，ドリオは，1944年２月25日までパリに戻ることはできず，かれが考えていたよりはるかに長く，東部戦線にとどまらなければならなかったのである[119]。

3. 強制労働徴用

1943年の秋以来，ドイツ国防軍最高司令部の命令で，ドリオは東部戦線に釘付けになっていた。イタリアが連合国軍に降伏した（1943年９月８日）ことを知るや，ドリオは特別休暇による帰国を願い出たが，要請は拒否された。

パリでは，フランス人民党執行部が，党首の帰国を早めるために，懸命に努力していた。10月６日，執行部の名において，シモン・サビアーニはヒムラーに手紙を送り，「資本主義とボルシェヴィズムの手先」とたたかい，「フランス国内にドイツ軍にたいするこれまでより敵対的でない雰囲気をつくり出す」ためには，ドリオの存在が「絶対に必要」であることを強調した。これにたいするヒムラーの返事の草稿が残されていて（それが実際に送られたかどうかは不明），そのなかで，「ドイツ帝国内相，親衛隊・警察長官[120]」は，ドイツ国防軍によってあたえられる休暇許可がこの嘆願に「まもなく満足をあたえるだろう」と答えている[121]。

しかし，その後，執行部の奔走にもかかわらず，なんの結果もえられなかったので，11月27日，フランス人民党はプレイエル会館で集

隊の分列行進よりもすこし広く，各「大隊」の間隔も広く，おそらく，隊員の総数は1,000人を下回ったであろう。J.-P. Brunet, *ibid*., pp.421-422.

115) *Archives Nationales*, F^7 14897, dossier 301-PPF.

116) V. Barthélemy, *op. cit*., pp.357, 362-369, 384; Saint-Paulien, *op. cit*., pp.387-389; *Journal de Marcel Déat*, 20 août 1943; D. Wolf, op. cit., p.388, note(2), 平瀬・吉田訳, pp.375-376, 401 注(31); J.-P. Brunet, *op. cit*., p.422.

117) ヴィシー政府によるフランス義勇軍団の連隊の再編成（1943年10月-1944年６月）については，K. Bene, *op. cit*., pp.140-150.

118) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Le Can, sous-dossier Correspondence Doriot/Le Can.

119) Ph. Burrin, *op. cit*., p.442; J.-P. Brunet, *op. cit*., p.423.

120) ハインリヒ・ヒムラー自身のこと。親衛隊（SS）は，ヒトラーの護衛部隊として，1925年に突撃隊から独立して結成されたが，1929年にヒムラーがその全国指導者になって以後，勢力を拡大した。親衛隊長官となったヒムラーは，1933年にバイエルン州警察長官に，1936年６月には全ドイツ警察長官に就任し，それまで各州の州政府に委ねられていた警察権を掌握した。その後，ヒムラーは警察組織を親衛隊（SS）に組み入れ，さらに，1939年には国家保安本部を創設し，その下に親衛隊保安部（SD）とゲシュタポ，刑事警察を統括した。

121) ドイツ帝国外務省政治文書。D. Wolf, *op. cit*., pp.478-479, 平瀬・吉田訳, pp.426-427.

会を組織し，この集会について報じた11月29日の『人民の叫び』紙は，「今後，フランスにおけるジャック・ドリオの存在は，反共産主義のたたかいに欠かすことができない」と主張した。同時に，党幹部たちは，地方のドイツ占領軍当局にたいする集団的働きかけを繰り返しおこなうよう，下部党員たちに要求した[122]。

一方，ドリオは，ル・カン宛ての手紙で，「残念ながら，ドイツ大使館の意思によって，僕はここにとどまっていなければならないのだ」と書き，「内閣総辞職が決まった」場合にしか帰国できないだろうと告白している。実際，ドリオの東部戦線滞在は，かれが定期的な休暇を許可される日付の1944年3月1日近くまで続いたのである。ドリオはル・カンに「僕が僕自身の国で居住を禁じられていると自己申告しないかぎり，ドイツ大使館が僕の兵士としての権利〔定期的な休暇をとる権利〕の行使に反対するのはむずかしい」といい，そして，ヒトラーがフランス人民党を解散させるのを許さなかったのは幸いであったが，しかし，自分が「ひどい脅しを受けているのをヒトラーは知らないのだ」と続けている[123]。

ドリオがヒトラーを買いかぶっていたとしても，かれはドイツ大使館の演じる役割については思い違いをしてはいなかった。ドイツ大使館では，1943年11月半ばに，アベッツがふたたび主導権を掌握し，リッベントロープ外相は，それまで外相の不興を蒙ったアベッツの代わりをつとめていたシュライアーを，ドリオに好意的で，外相と直接連絡をとることを許されていた大使館主席参事館ハンス・リヒャルト・ヘメンに交代させた。1944年2月25日，リッベントロープへの秘密の報告のなかで，ヘメンは，南部地区の対独レジスタンス活動家たちのグループにたいしてヴィシー政府がなにもしないことを非難し，ラヴァル内閣をドリオのような人物によって率いられる「恐怖政治内閣」に代えることが望ましいのではないかと尋ねている。一方，アベッツは，その『回想録』のなかで，「わたしは，このような考え方には賛成できなかった。実際，ラヴァルの政策が，しだいに中立的立場に傾いてきていて，部分的にしかドイツの願望に一致していなかったとしても，ラヴァルが出す指示は県行政やヴィシー政府の機関によって確実に守られたであろう。これにくらべると，ドリオ派内閣になれば，たしかに，占領軍にたいしてもっと気遣いを示した政策を約束しただろうが，しかし，まさに，その理由によって，かならずや，フランスの行政機関の崩壊を引き起こすことは避けがたかったであろう」，「わたしにとって唯一の問題は，占領軍の安全のためには，ラヴァル内閣かドリオ内閣かどちらがよいかということであった」と書いている[124]。

ドイツ大使の職務に復帰するや，アベッツは，友人のド・ブリノンやデアとともに，ラヴァルにたいして内閣改造問題を提起し，ラヴァルはフィリップ・アンリオ[125]とマルセル・

[122] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 336, rapport du 13 janvier 1944 et du 28 décembre 1943; V. Barthélemy, *op. cit.*, p. 377.

[123] *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, Dossier Le Can, sous-dossier Correspondence Doriot/Le Can, lettre de Doriot à Le Can des 14 et 30 décembre 1943.

[124] O. Abetz, *op. cit.*, pp. 301-303.

[125] フィリップ・アンリオは，1889年1月，ランスで生まれた。1924年の総選挙での「左翼連合（カルテル・デ・ゴーシュ）」の勝利後，1925年に，カステルノー将軍が創立した「全国カトリック連盟」に加盟，1932年にボルドーから代議士に選出された。1936年にもふたたび選出され，ルイ・マランが委員長をつとめる共和派連盟の議員として，下院に議席をもった。1938年には仏独協調に賛成し，対独強硬派と対立したが，対独宣戦布告後は，戦争遂行を支持した。1940年6月の休戦協定調印後は，ペタン元帥を支持し，週刊紙『グランゴワール』に寄稿しながら，毎週，ヴィシー政府ラジオ局で論説を担当し，国民革命支持のための講演旅行をおこなった。ドイツの対ロシア宣戦布告後は，対独協力の支持者となり，1944年1月，ヴィシー政府の情報相となったが，1944年6月28日明け方，パリ7区ソルフェリーノ街10番地の官舎で，武装したレジスタンス活動家たちによって暗殺された。

デアの入閣を受け入れた。また，ドリオの側近の１人ないし２人の入閣も承諾したという噂が立った[126)]。しかし，ドリオが東部戦線にいて不在だったので，もしラヴァルがこのような行動をとったならば，フランス人民党内に深刻な分裂の種がもちこまれたことであろう。実際には，フランス人民党のジャーナリストたちから激しい軽蔑的な言葉で攻撃されていたラヴァルは，フランス人民党にたいして腹を立てていて，自分の「忠実な手下たち」にこのような攻撃をさせるドリオを許せなかった[127)]。

対独協力者たちの世界では，内閣改造をめぐっての興奮が長期間続いた。1943年11月中頃，フォサーティは，マルセル・ブーシェール（元ヴォージュ県選出代議士，「政権要求大会」のとき，フランス人民党に入党）とともに，ひそかにドイツ大使館参事官タイレンに働きかけた。フランス人民党の２人の密使は，交渉相手タイレンに，とりわけ，ドイツ企業で働かせるフランス人労働者を確保するためにドイツが要求している，「強制労働徴用[128)]（Service du Travail Obligatoire, STO）」にたいして反抗的な対独協力拒否者の急激な増加が原因で，フランスでは社会不安が増大しているので，ラヴァル内閣になんらの変更も加えないままでいるのはむずかしいと強調した。そして，プラトン提督[129)]を首相として，その周りに内相にドリオ，

[126)] Fernand de Brinon, *Mémoires*, Editions LLC, Paris, 1949, pp.191, 210; Saint-Paulien, *op. cit.*, pp.410-411.

[127)] J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp.447-448.

[128)] ドイツは，戦争遂行のために，フランスの労働力を必要としていた。ヴィシー政府は，ドイツへの労働力提供にも協力し，1940年９月には，ドイツ企業によるフランス人労働者の募集を認め，失業対策という観点からも，ドイツへの出稼ぎを奨励した。しかし，最初の２年間でドイツへ赴いたフランス人労働者は，15万人弱にすぎなかった。
ヒトラーは，ナチ党員で，狭量で粗暴な性格で知られたチューリンゲン大管区長官フリッツ・ザウケルを，1942年３月，外国人労働力の調達責任者に任命し，ベルギー，オランダ，そしてフランスにおける労働力の徴用にあたらせた。フランスに着任したザウケルとラヴァルとのあいだで，1942年５月15日に，フランス人労働者の最初の引き渡しが取り決められ，25万人の労働者（うち熟練労働者15万人）が要求された。この要求にたいして，ラヴァルは全面的協力を約束し，1942年６月には，「交替制」の原理（フランスの戦時捕虜ひとりの釈放と引き替えに，熟練労働者３人をドイツの工場に送り出すという制度）を提案した。
しかし，この「交替制」は，志願制にもとづいていたので，成功せず，結果はザウケルの要求した数字にまったくとどかず，このため，ついに1943年２月には，「強制労働徴用（STO）」の制度が徴兵年令者全員に適用されることになった。この結果，ラヴァルの政権復帰とともに，フランスは，ポーランドについでドイツに外国人労働者をもっとも多く供給する国になり，また，すべての被占領国のなかで，熟練労働者の最大の供給源となった。
こうして，1942年６月１日から1944年６月までにドイツに送られたフランス人労働者の累積数は75万1,000人にのぼった。しかし，「強制労働徴用（STO）」は，フランスの若者たちをレジスタンスに走らせる重要な原因のひとつとなった。若者たちは，ドイツ行きの列車に乗り込むか，山に逃げるかの選択に迫られ，こうして，マキと呼ばれる対独抵抗組織が，アルプスや中央山塊地帯やピレネー地方に広まった。
渡辺前掲書, pp.146-149; R. O. Paxton, *op. cit.*, pp.332, 350-351, 361-362, 406-410, 渡辺・剣持訳, pp.274, 288-289, 297-298, 334-338; Robert Aron, *Histoire de Vichy 1940-1944*, Arthème Fayard, Paris, 1954, pp.532-535, 624-631; Edward L. Homze, *Foreign Labor in Nazi Germany*, Princeton University Press, Princeton, 1967; Jacques Evrard, *La déportation des travailleurs français dans le IIIe Reich*, Arthème Fayard, Paris, 1972; Alfred Sauvy, *La vie économique des Français de 1939 à 1945*, Flammarion, Paris, 1978, pp.177-178; Jean-Pierre Azéma et Olivier Wieviorka, *Vichy 1940-1944*, Académique Perrin, 2000, pp.97-99, 101-103, 113-114, 255-257; John F. Sweets, *Choices in Vichy France. The French under Nazi Occupation*, Oxford University Press, New York, Oxford, 1994, pp.23-29, 196-198; Michel Margairaz, *L'Etat, les finances et l'économie. Histoire d'une conversion, 1932-1952*, Comité pour l'Histoire économique et financière de la France, Ministère de l'Economie des Finances et du Budget, I, pp.692-707; Patrice Arnaud, *Les STO. Histoire des Français requis en Allemagne nazie 1942-1945*, CNRS Editions, Paris, 2010.

[129)] シャルル・プラトン，1886年，ボルドーのプロテスタントの家庭に生まれる。海軍兵学校卒業，第１次世界大戦中は潜水艦の艦長。1940年９月６日，ラヴァルが副首相であった内閣で植民地相に任命されたが，心底からのイギリス嫌いで，ドイツの勝利を確信し，対独協力に全面的に身を投じた。1942年４月には首相補佐官となり，陸海空３軍の調整を担当したが，ヴェガン将軍やオーファン提督と意見が対立し，また，とりわけ，かれに委ねられた反フリーメーソンのたたかいで，厳格なプロテスタント，プラトンはラヴァルと衝突し，1943年３月26日，政

警察長官にダルナン，外相にジョルジュ・ボネ[130]を配し，デアの入閣を排除した強力な内閣を組閣するよう提案した。

タイレンは，この提案に全体としてきわめて好意的な論評をつけくわえて，アベッツに伝達した。この計画が実現すれば，プラトン提督の背後で，実際には，おそらくドリオが政権の実態を行使することになったであろう。しかし，フランス人民党にたいするタイレンの好意をすこしも共有していなかったアベッツは，この提案をまったく考慮しようとはしなかった。その結果，1944 年 1 月初めにおこなわれた内閣改造は，ダルナン（警察長官）とアンリオ（情報相）だけを入閣させるという，きわめて部分的なものにとどまった。果てしない裏工作ののちに，3 月 16 日には，デアが労相に起用された。ラヴァルはヴィシーでのかれの旧知であったフランス人民党の 1 メンバー，ジャーナリストのジョルジュ・ギルボーを首相補佐官に任命しようと考えていたようであったが，しかし，結局，あらたに入閣した閣僚には，ドリオの側近はひとりも含まれていなかった。

1944 年 2 月 25 日，ドリオはようやくパリに戻ってきた。そのとき，フランス人民党の党員数はおそらく減少していたとおもわれるが，しかし，かれの補佐役たちは，対独協力組織の再編成のためにデアが始めた新しい試み――1943 年初めの国民革命戦線（FRN）の設立――から党を守っていた。しかしながら，ドイツ占領軍はドリオに自由な行動を許さず，そのため，かれは，フランス義勇軍団（LVF）に新兵を補充するという目的のためだけにフランスに戻ってきたのであり，狭義の政治活動はいっさい自制すると断言せざるをえず，ドリオの激しいラヴァル攻撃を予想していた党員たちをとまどわせた。

ドリオは，義勇軍団の旅団長に昇進したばかりのエドガール・ピュヨー大佐，ジャン・バソンピエール大尉，フランソワ・ゴーシェ少尉，マルク・オージェ[131]（サン・ルー），マイヨール・ド・リュペ従軍司祭らと協力して，北

府から排除された。1944 年 7 月 21 日，対独レジスタンス組織，義勇遊撃隊に捕えられ，8 月 28 日，正式の裁判なしで死刑を執行された。

[130] ジョルジュ・ボネは，1938 年 4 月 10 日から 1939 年 9 月 13 日まで，第 3 次ダラディエ内閣で外相とつとめた。

[131] マルク・オージェ，1908 年，ボルドーに生まれる。作家，ペン・ネームは「サン・ルー」。兵役を終えたのち，『オートバイ評論』のスポーツ・ジャーナリストとなり，かれ自身も，オートバイに乗り，登山やノルディック・スキーをおこない，また，ユースホステル運動の創始者のひとりとなった。1935 年に社会党（SFIO）に入党し，1936 年には，人民戦線内閣のスポーツおよびレジャー担当の政務次官になった。1937 年，ユースホステル運動の代表として，世界青年会議に出席のため渡米したが，その旅行中，共産党の代表たちがドイツを対象とする激しい好戦主義的キャンペーンをおこなっていることを知り，平和主義的感情を傷つけられて，会議への出席をとりやめた。それ以後，ユースホステル運動のなかで，反戦キャンペーンを展開した。1940 年のフランス敗戦後，1940 年 7 月の『ラ・ジェルブ』紙（パリで発行された対独協力に好意的な最初の週刊紙）の創刊に積極的に参加し，翌年には，対独協力グループ青年組織，「新ヨーロッパ青年団」を創立した。1941 年夏にフランス義勇軍団（LVF）が結成されたとき，かれは，これをヨーロッパ共同体の実現というかれの理想の始まりと考え，義勇軍団に参加して東部戦線へ出発した。1942 年 7 月にロシアの戦場に到着し，秋まで対ゲリラ作戦に参加したが，傷病兵として本国に送還されされたあと，1943 年 6 月に，フランス義勇軍団（LVF）の機関紙『ヨーロッパ戦士』を創刊した。また，1943 年末に設立されたフランスのナチス武装親衛隊（Waffen-SS）の機関紙『ドヴニール』（「ヨーロッパ共同体のための闘いの新聞」という副題をつけて，1944 年 2 月から 7 月までフランスで，ついで 1945 年 4 月までドイツで発行された）を主宰したが，親衛隊（SS）のイデオロギー上の責任者たちの偏狭な考え方と衝突した。1945 年 4 月には「アルプスのあばら家」に避難したが，ひそかにフランスに帰国し，ついでアルゼンチンに逃れた。1948 年 11 月 15 日に欠席裁判で死刑を宣告されたが，それより以前，1946 年に，サン・ルーのペンネームで小説を公刊して大好評を博し，出版界にカムバックしていた。1951 年には特赦を受け，1953 年 5 月にフランスに帰国した。その後，サン・ルーは約 30 冊の小説を発表し，それらは広範な読者を獲得した。そのうちのもっとも有名な小説（『義勇兵』，『異端者たち』）は，フランス義勇軍団（LVF）とフランスのナチス武装親衛隊の戦士たちの冒険的体験を描いたものである。

部，南部両地区の大都市で，フランス義勇軍団（LVF）のための宣伝遊説に着手した。かれは，4 月 2 日にはマルセイユで，5 日にはリヨンで，16 日にはパリの冬季競輪場で，19 日にはナンシーで演説をおこなった。マルセイユでは，かれはつぎのように叫んだ。「フランスの子供たちよ，あなた方はあなた方の国が生きつづけるのを望みますか，それとも死ぬのを望みますか。その答はあなた方におまかせします。もしあなた方が肯定的に答えるなら，フランス義勇軍団（LVF）は喜んであなた方を迎え入れるでしょう。」しかし，5 月初めに終わったこの宣伝キャンペーンは，以前ほどには成功しなかった[132)]。

この遊説キャンペーンを始めるまえの 3 月 14 日，ドリオ，バソンピエール，ゴーシェは，ド・ブリノンの案内で，ペタンを訪問している。最初に，ド・ブリノンがペタンに「元帥閣下，これがあなたに忠誠の証拠を示しにやってきた東部戦線の 3 人の戦士です」と訪問者たちを紹介した。バソンピエールの証言によれば[133)]，ペタンは前年バソンピエールの訪問を受けたことを覚えていたが，ドリオのことは覚えていなかった。ペタンはそれまですくなくとも 2 度ドリオに会っていて，1940 年 11 月には，ドリオを引きとめて，食事を共にしていた。ペタンが訪問者たちに最初に話しかけたのは，つぎのような言葉だった。「諸君はだれと戦っているのですか？ロシア人にたいしてですか，それともロシア人と一緒にですか？」あきらかに，ペタンの老衰を示す言葉であった。ド・ブリノンの長い説明を聞かずに，ペタンは，扇形になって立っている訪問者たちの中心にいるドリオに視線を止め，「あなたにはどこかで会ったことがあるようにおもわれる」と声をかけた。「はい，元帥閣下，おそらくスペインで，閣下が大使としてそこにおられたときです」とドリオは答えた。ペタンが「いや違う，モロッコでだとおもう」といったので，「元帥閣下，わたしはモロッコにはいったことがありません」とドリオは応じた。それにたいして，ペタンは「それはよかった。もうすこしで，わたしはあなたを銃殺させるところだった」といったという。ついで，ペタンは，ドリオに，「みなが必要としているのは，あなたのような人物です」といったあと，訪問者たちに退去を許したという。

また，別の，しかし間接的な――おそらくドリオを情報源とする――証言によれば[134)]，ペタンはつっけんどんな喧嘩腰の態度で訪問者を揶揄し，「まず聞きたいが，いったい諸君はだれと戦っているのかね？ロシア人は，われわれと同様な人間だよ。わたしはボルシェヴィズムのことは知らないし，あなた方の成功よりもあなた方の失敗に興味があるよ」といったという。痛ましいほど哀れなペタンの老化[135)]を証明するこれらの会話は，対独協力の小さな世界では，すぐに知れわたったようであった[136)]。

東部戦線からフランスに帰ってきたドリオは，帰国早々，ひとつの深刻な問題に遭遇した。それは，ドイツにとって必要なヨーロッパの労働力の調達責任者にヒトラーが直接任命したフリッツ・ザウケル（チューリンゲン大管区

132) J. Delarue, *op. cit.*, p. 218 ; V. Barthélemy, *op. cit.*, p. 392.

133) *Archives Nationales*, F^7 15300, dossier Bassompierre, 2^e audition de l’intéressé par un commissaire des Renseignements Généraux, le 2 décembre 1946 ; H. Amouroux, *op. cit.*, Ⅷ *Un printemps de mort et d’espoir. Joies et douleurs du peuple libéré, septembre 1943-août 1944*, p. 328.

134) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Ginette Garcia, procès-verbal d’audition du 31 juillet 1945.

135) ペタンとドリオたちとの会見がおこなわれたのは，午後 5 時頃であった。ペタンの官房長ムーラン・ド・ラバルテートによれば，ペタンは朝には才気煥発であったが，午後には精神的混乱の形跡を示し，それは時間とともにしだいに悪化していたっという。Georges du Moulin de Labarthète, *Le temps des illusions*, Editions du Cheval ailé, Paris, 1947, pp. 175, 182.

136) *Journal de Marcel Déat*, 18 mars 1944.

長官）からの執拗な要求であった。ザウケルは，フランス人民党に，強制労働徴用（STO）に反抗するフランスの青年たちの追跡に当たる一種の補充警察部隊を編成させようとしていて，その名前を「社会正義のための行動集団 Groupes d' Action pour la Justice sociale, GAJS」としようとしていた。かれは，みずから，ピラミッド街のフランス人民党本部に出向き，直接ドリオにかれの目的について話したいといってきた。すでにヴィクトル・バルテレミーが党を代表してザウケルの交渉相手になっていたので，ドリオは，バルテレミーに，会談のあいだ，かれのそばにいてくれるよう頼んだ。

こうして2人の会見に同席することになったバルテレミーは，その会談の模様をくわしく語っている[137]。バルテレミーによれば，ドリオは，つぎのように話して，ザウケルの要求は受け入れがたいと説明した。「あなたは，強制労働徴用（STO）への反抗者の追跡に当たる一種の警察隊をわが党の党員のなかから募集することをわれわれに提案しておられます。しかし，われわれはそれを望みません。われわれはわれわれ自身の警備隊をもっていて，それは1936年の結党以来存在しています。それは，われわれの集会を守ることに充てられるのです。また，われわれは最近，フランス衛兵隊という組織をつくりました。それは，もっとはっきりした軍隊式の集団で，テロ行為が広まり，本格的な内戦の様子を呈するようなすべての事態に立ち向かうのが目的です。今日まで，このような事態は起こりませんでしたが，しかし，これまで，テロリストの攻撃によって多くの党員が殺害されました。わが党は，毎日，ひとりの，ときには幾人もの党員を失っています。党のすべての機関はその報復を願っていますが，わたしはいっさいの報復措置に反対なのです・・・それに，あなたもご存じのように，われわれは強制労働徴用（STO）という考え方そのものに反対なのです。」

これにたいして，ザウケルは，つぎのようにのべて，要求を引っ込めようとはしなかった。「そのようなことはみな知っていますし，あなたの言い分も分かっています。しかし，わたしの任務は，ドイツにとって，すなわちヨーロッパにとって，きわめて重要なのです。それは，われわれの共通の勝利の条件のひとつなのです。だから，われわれすべては，共通の利害のなかで行動するために，個人的観点を排除することができなければなりません。それに，われわれの同志の何人かは，そのことをよく理解しています。マルセイユのサビアーニ氏とニースのメイサンク氏は，われわれの提案に同意しました。両氏はわたしに同意しただけでなく，今年初めから，かれらの"社会正義のための行動集団"を募集し組織しはじめていて，それは良好な成果をあげています。」党の指導部の知らないうちに，マルセイユのサビアーニとアルプ・マリティム県の党幹部メイサンクが，ザウケルの提案を受け入れていたのである。このような予期しなかった同志たちの「裏切り」の話を聞いて，ドリオの顔は青ざめ，血の気を失った。もはやドリオには断固とした拒否によってザウケルに反対することができず，「社会正義のための行動集団（GAJS)」の創設を正式に認めざるをえなかった。「しかし，わたしは，これらの"行動集団"がきわめて限定された，そして，可能なかぎり，理論上の活動しかしないように配慮した」とバルテレミーは書いている。サン・ポーリアンもまた，ドリオは「ザウケルと合意した」が，しかし，党政治局はそれにたいして頑なに反対の態度を示したことをあきらかにしている[138]。

1944年3月29日，フランス人民党セーヌ県連書記によって，「社会正義のための行動集団

[137] V. Barthélemy, *op. cit.*, pp. 374 - 377, 383 - 390.

[138] Saint-Paulien, *op. cit.*, p. 433.

（GAJS）」の創設が告知された。そのメンバーになるには，それに専従し，いっさいの職業活動をやめなければならなかった。志願者は，まず，パリ20区モルティエ大通りの兵舎で1週間の研修を受けなければならなかった。ついで，かれらは，武器の携帯を許可され，いつでも，どこでも巡回できる権限，反抗者の逮捕の権限をあたえられ，フランスとドイツの官憲の助けを要請することのできる特別な身分証明書を受け取った。給料は月額，パリ地域については3,800フランに決められたが，しかし，まもなく，5,000フランに引き上げられた。

団員の身分規定には，団員は必然的に「強制労働徴用（STO）」を免除され，「すべての健康な党員」は「社会正義のための行動集団（GAJS）」に入団することができると書かれていた。しかし，しばしば，団員たちの不正行為が非難の急激な高まりを引き起こし，苦情が殺到するようになった。その結果，1944年8月半ばには，パリ地区の300人の団員のうち73人が解雇され，さらには盗み，恐喝あるいは職権乱用で投獄されるものもいた[139]。また，1944年5月10日，ヴィシー政府の治安担当長官ダルナンが，カール・オーベルク親衛隊司令官への手紙のなかで，「いくつかの政党の党員たちが，ヴィシー政府の許可もないのに，あるときは個人で，あるときは小さな集団で，機関銃やピストルで武装して，街のなかを歩き回ったり，政府に反対する叫び声を上げたり，首都中の街の壁に侮辱的な落書きをしたりしている」と苦情をいっている[140]。

このような「社会正義のための行動集団（GAJS）」の団員数は，フランス全体で2,500人に達したとおもわれるが，いくつかの県の例を通して，その役割と活動の実態をいっそうよく理解することができる。

たとえばアンドル・エ・ロワール県では，1943年には，フランス人民党は無気力状態に陥っていたが，2人の地方幹部が100人ほどの活動的なメンバーを入党させることに成功し，党はふたたび活発になった。その新しいメンバーの大部分は，「強制労働徴用（STO）」を免れようとした18歳から22歳までの青年であり，そのほとんど全員が「社会正義のための行動集団（GAJS）」への入団を志願した。パリのモルティエ大通りの兵舎で研修を終えたのち，かれらはドイツ警察によって武装され，とくにレジスタンス組織を探知する役割をになわされた。かれらは，まるで民兵隊員のように，秩序を維持し，「強制労働徴用（STO）」拒否者を狩り出すという口実の下に，実際には，強盗をはたらき，かれらの網にかかった人びとから金品を脅し取った。かれらは，あたえられた月給を数日で使い果たし，たえずドイツ警察に給金の追加や前払いをせがんだ。かれらの不正行為の実態は，他の対独協力組織のメンバーをも唖然とさせたほどであった[141]。

また，アリエ県モンリュソン地域では，「社会正義のための行動集団（GAJS）」は，「強制労働徴用（STO）」拒否者と同時にユダヤ人の狩り出しにあたっている。モンリュソンの副知事が知事宛てに提出した報告によれば，そのメンバーには何人かのふだつきの前科者がいたが，かれらは，何かにつけ，「ピストルを手にして，家宅捜査をおこなったり，街のなかや映画館で職務尋問をおこなったりした。これらの

139) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Lesueur, audition de Henri Andrieu, 13 juillet 1945 ; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 336, dossier《PPF. Groupe d'action pour la Justice sociale》, rapports des 30 mars, 7, 8, 25, 28 avril, 8 mai 1944 ; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 340, numéro de mai 1944 de *La correspondance populaire française*, article de F. Canobbio, secrétaire national à l'organisation,《les Groupes d'action pour la Justice sociale》.

140) *Archives Nationales*, F^7 14897, dossier 301.

141) *Ibid*., transmission par le préfet d'Indre-et-Loire au ministre de l'Intérieur, le 22 juillet 1944.

青年たち幾人かは，いつも酔っ払っていて，しかも，武器の取り扱いがきわめて不器用なため，その武器で自分が負傷したりした。」1944 年 7 月末には，「行動集団」はきちんとして非の打ち所のない数人の青年を逮捕したり，また，自分たちをドイツの警察官とおもわせて，フランスの警官たちから武器を取り上げようとしたりした。このように非道な，かれらの振舞いに激怒した世論は，「マキ（対独レジスタンス運動の組織）が“社会正義のための行動集団（GAJS）”の活動を終わらせてくれるよう，ほとんど公然と願っています」と副知事はその報告のなかで書いている。そして，実際に，それは起こったことであった。1944 年 7 月 27 日午後 1 時 30 分頃，ドイツ占領軍が徴用し，フランス人民党の党員と「社会正義のための行動集団（GAJS）」のメンバーが集まっていたモンリュソンのエキュ・ホテルを標的に，10 台ほどの車で到着したマキザール（対独レジスタンス運動員）たちが作戦行動を起こし，かれらはホテルの 1 階に銃弾を浴びせ，その結果，「社会正義のための行動集団（GAJS）」のリーダーを含む 3 人が殺され，7 人が重傷を負った[142)]。

こうして，フランス人民党は，とくにドリオの手が届きにくい地方では，かれの指導を完全に逃れて，ドイツ警察の補充組織となったのであり，一方，ゲシュタポは，潜在的な反対者を恐怖で脅すために，殺し屋集団を社会の底辺やフランス人民党の党員のなかから集めようとしたのである。このようにして，ゲシュタポに奉仕した顕著な例のひとつは，フランシス・アンドレである。アンドレは，ドリオ同様，青年時代は共産党員であり，1936 年に共産党と袂を分かち，フランス人民党に入党したドリオの腹心のひとりであったが，1944 年には，リヨンの親衛隊保安部（SD）の指導者で「リヨンの虐殺者」と呼ばれたクラウス・バルビーの指揮の下，レジスタンスのテロ活動にテロで答える「反テロリズム国民運動」という組織を設立し，リヨン地域全域に遠征隊を何度も派遣した。1943 年 11 月には，かれは，部下たちとともに，グルノーブル地方の多数のレジスタンス活動家の殺害に加担し，レジスタンスを壊滅させることに一役買ったのであった[143)]。

4. 戦況の悪化

1944 年 6 月には，フランス人民党の地方組織はほとんど壊滅状態にあった。たとえばリール支部には，もはや 6，7 人の党員しかいなかった。多くの地方幹部が辞職するか，いつのまにか姿を消してしまっていた[144)]。しかしながら，パリでのフランス人民党の活動を考えるならば，同党は対独協力主義組織のうちでもっとも活動的な集団とみなされ，事実，パリでは，同党は，1944 年 7 月まで，日常的な政治活動を続けていた。同年 6 月 6 日には連合国軍がノルマンディー上陸作戦を決行し，8 月 25 日にはパリが解放されたことをおもえば，それは驚くべきことであった。

6 月末には，同党はびらの配布を増加させ，「パリを兵糧攻め！」と題したびらは 12 万枚印刷され，そこには「飛行機が鉄道施設，橋，道路を爆撃するのは，数百万のパリ市民を飢えさせるためだ」などと書かれていた。その他，中産階級向け（「共産主義はあなた方を消滅させようとしている」，5 万枚），カトリック教徒向け（「神なき共産主義」，15 万枚），農民向け

142) *Archives Nationales*, loc. cit., rapport du sous-préfet de Montluçon au préfet régional (28 juillet 1944) et rapport du procureur général près la Cour d'appel de Riom au Garde des Sceaux (1er août 1944).

143) Jacques Delarue, Un SS nommé Barbie, *L'Histoire*, no. 82, p. 60 ; Marcel Ruby, *La Contre-Résistance à Lyon*, Hermé, Lyon, 1981 ; J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp. 451-454. フランシス・アンドレは，1945 年春に，逃亡先のイタリアで捕えられ，リヨンで裁判にかけられて死刑を宣告され，1946 年 3 月 9 日，多くの部下とともに処刑された。

144) *Archives Nationales*, F^7 14897, dossier 301, rapport du préfet du Nord (juin 1944).

(「農民の敵，共産主義がヨーロッパに侵入しようとしている」，20万枚)，労働者向け（「戦争はわれわれの国，われわれの頭上に迫っている」，40万枚）の大量のびらが撒かれた[145)]。さらに，集会も続けられようとした。1944年7月2日，党結成8周年を記念して，フランス人民党はヴァーグラム会館での大集会を召集したが，すべての政府機関が混乱し麻痺して，すでに半身不随になっていたために，ドリオがラヴァル政府を攻撃するのではないかと恐れて，アベッツは集会を禁止させた[146)]。事実，ドイツ占領軍当局の手中に握られていたはずのラジオ・パリにおいても，その著名な解説者でドリオのもっとも忠実な同調者のひとり，ジャン・エロルド・パキが，「死体置場のカラス」と題した手きびしい論説によって，ラヴァルを痛烈に批判した。しかしながら，軍事情勢の悪化につれて，フランス人民党の党員たちもしだいに神経質になり，深刻な国内的騒乱が起こった場合には，自分自身も家族も安全な場所に避難したいとおもうようになり，党本部にトーチカを建設して武器を集めたりした。

この頃のフランス人民党の実質的な勢力は，どちらかというと，その党員の実員数よりも――1944年初めには，多数の党員が党員証を取り戻して離党し，党員数はいちじるしく減少していた――同党が「社会正義のための行動集団（GAJS)」やドイツの軍事組織に加入させた武装した党員たちの数にあったといえる。そのドイツの軍事組織とは，なによりも，「武装親衛隊（Waffen-SS)」であった。この組織は，1943年7月22日にラヴァルの政令によって創設されたものであり，同政令は，この組織を「国土の外でボルシェヴィズムと戦うために，ドイツ政府によって設立された組織」と表現し，フランス人がこれに入隊することを許可していた。入隊を志願したフランス人はナチス親衛隊（SS）の制服を着せられ，「フランス武装親衛隊第7突撃旅団」を形成した。1944年1月には，同旅団は2,840人の隊員からなり，また，1943年12月のドイツの資料によれば，フランス武装親衛隊員の20パーセントがフランス人民党に属していた。それに，同旅団の指揮はフランス人民党の党員ギャモリー・デュブルドー中佐にゆだねられていた[147)]。

これにたいして，1941年12月にジョゼフ・ダルナンらによって創設された「戦士団保安隊（SOL)」の後継組織，「フランス民兵団」とフランス人民党との関係は，曖昧で，不安定でもあった。戦前から，ダルナンとバルテレミーとの個人的関係は友情で結ばれていた[148)]。また，フランス人民党が主として北部地区に定着していたのにたいして，民兵団はほとんどもっぱら南部地区で団員を募り，2つの組織は競合的ではなく，相互に疑念や嫉妬を抱きあう関係にはなかった。1944年1月半ば，ドイツ占領軍が北部地区への民兵団の拡大を許可したが，その計画は失敗に終わった。もともと反ドイツ的傾向の強かった民兵団にたいして，フランス人民党とその他の対独協力組織は親独的，ファシスト的要素を存分に発揮していた。それに，すくなくともそれぞれの結成時には，両組織にはあきらかな違いがあり，民兵団は，ドリオがあからさまに批判していたように，「ブルジョワ的反動分子の一団」であり[149)]，中産階級出身の若者たちが多数を占めていたのにたいして，フラ

[145)] *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 336，多数の報告とびらの写し。

[146)] D. Wolf, *op. cit.*, p.394，平瀬・吉田訳，p.381.

[147)] ニュルンベルク文書館，現代ユダヤ関係資料センター，CXXXVⅢ-26，1943年12月8日にドイツ政府に提出された文書。Jean Mabire, *La brigade Frankreich*, Arthème Fayard, Paris, 1973, p.29にギャモリー・デュブルドーの写真が掲載されている。Pascal Ory, *Les collaborateurs*, Editions du Seuil, Paris, 1977, pp.265-267; Jean-Raymond Tournoux, *Le royaume d'Otto*, Flammarion, Paris, 1982, pp.336-337; J.-P. Brunet, *op. cit.*, pp.454-455.

[148)] V. Barthélemy, *op. cit.*, pp.341-342, 370.

[149)] Jacques Delperrié de Bayac, *Histoire de la milice*, Arthème Fayard, Paris, 1969, pp.178, 235.

ンス人民党ははるかに「民衆的」であった。

1944年春には，ドリオは，フランス人民党が独立性を失うのを恐れて，かれとダルナンとの同盟を促進しようとするアベッツと親衛隊（SS）司令官カール・オーベルク大佐の2人からの圧力に抵抗した。何度も会談がおこなわれたが，両者の両立不可能を確信することで終わった。

デアの国家人民連合が弱体化したあとでは，民兵団の指導者ダルナンが，ドリオにとって，あたらしい危険なライヴァルのようにおもわれた。ドリオは，先手を取ろうとして，ピエール・アントワーヌ・クーストーらフランス人民党の党員たち数人を民兵団に参加させていたが，しかし，クーストーは，民兵団のリーダーたちが軍事的，政治的能力をもっていないことに気づくと，さっさと民兵団を退団した。4月中頃には，フランス人民党指導部は，すべての党員たちに民兵団に参加することを正式に禁止し，7月中頃には，ドリオみずから，マンシュ県に視察旅行に行った帰りに，民兵団にはいっていたルーアンのフランス人民党の8人の若い党員たちを退団させようとした[150]。また，マキの組織が強力で治安がしだいに悪化していたいくつかの県では，民兵団員とフランス人民党の党員たちのとのあいだで激しい紛争が起こり，オート・ヴィエンヌ県では，オラドゥール・シュール・グラーヌ村でナチス親衛隊（SS）によって村人642人が虐殺された事件[151]（1944年6月10日）のあとは，両者の反目はゲリラ隊の攻撃や銃撃戦を引き起こすほどになった[152]。

1944年の春のあいだ，ドリオは，マキと戦い，そして，かれ自身が政権を取って「ヴィシーの裏切り者を追い出す」ために，フランス義勇軍団（LVF）をフランスに帰国させる方法を探し求めていた。連合国軍のノルマンディー上陸以前に，ドイツ国防軍はフランス義勇軍団（LVF）を西方へ戻そうと決めていたが，おそらく，ラヴァルとド・ブリノンの反対によって，義勇軍団は東方へ押し戻されたようであった。6月18日には部隊の配置交替の命令が届き，義勇軍団の兵士たち自身も，ノルマンディーでドイツ軍とともに戦うために，帰国するものと信じていたが，しかし，その命令は取り消され，かれらはドイツにとどまらざるをえなかった[153]。

いずれにせよ，確かなひとつの事実は，ドリオや対独協力派組織の主要リーダーたちが，フランス義勇軍団（LVF）を，ドイツ軍とともに，自由フランス軍が参加している連合国軍と戦わせるために，西武戦線へ戻したいとおもっていたことであった。

6月13日には，ドイツ大使館で，アベッツと参事官たちの主催で，親独政党・団体のすべてのリーダーたち――ドリオ，デア，ビュキャール，マックス・ニッパン（北部地区におけるダルナンの代理人），ド・ブリノン（フランス義勇軍団LVF委員会の委員長として），マリヨン（武装親衛隊Waffen-SS友の会委員長として）――が出席した会合が開かれた。すべての参加者が，「ドイツとヨーロッパのために身

[150] J. Delperrié de Bayac, *ibid*., pp.248-249; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 336, rapport du 13 janvier 1944; *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Cousteau, pièce 41, procès-verbal d'audition de Cousteau le 11 janvier 1943; *Archives Nationales*, F7 14897, dossier 301-PPF, notes et rapports des 4 mars, 11 avril et 19 juillet 1944.

[151] 藤村信「オラドゥルの村」『世界』岩波書店，1980年8月号，pp.64-75; 杉山毅『緑の中の廃墟』渓水社，1987年，pp.5-35; 渡辺前掲書，pp.234-235; Robin Mackness, *Oradour: massacre and aftermath*, Bloomsbury Publishing Ltd., London, 1988, 宮下嶺夫訳『オラドゥール　大虐殺の謎』小学館文庫，1998年；内堀稔子（文）・吉田一法（写真）『失われた土曜日』透土社，1991年。

[152] J. Delperrié de Bayac, *op. cit*., p.432; Saint-Paulien, *op. cit*., pp.450-451.

[153] *Archives Nationales*, W Ⅲ 110, sous-dossier 13, pièce 4, rapport de l'inspecteur Valentini; J. Delarue, *op. cit*., pp.219-221; J.-P. Brunet, *op. cit*., pp.456-457.

を投げ打ち，いざというときには，武器を手にして英米軍と戦おうとおもっているフランス国民が，それをおこなうことのできる機会を待っていることを忘れないようにといいました」と，アベッツがリッベントロープに電報を打っている。そして，出席者全員が，「侵略」（1944年6月6日の連合国軍のノルマンディー上陸のこと）がおこなわれた以上，「フランス義勇軍団LVFと武装親衛隊Waffen-SSのメンバー全員が，かれらの祖国から遠いロシアでではなく，フランスの土地で国内外の敵にたいして，かれらの国を守るために戦いたいという熱烈な気持ちをもっている」という事実を力説し，「ドリオとマリヨンは，フランス国土の内外に戦争が拡大しているという知らせを日々受けているときに，祖国から3,000キロ離れた土地で戦うのは，フランス人にとってはきわめてつらいことだと強調しています」と続けている。さらに，アベッツは，フランス義勇軍兵士の戦闘意欲は，おそらく，かれらが不倶戴天の敵，ド・ゴール派とその同盟者の英米連合軍と命を懸けて戦うという信念によって強められるだろうと指摘し，最後に，すべての対独協力グループのものたちは，「ドイツの軍事的敗北は，かれらの指導者とそのもっとも重要な支持者たち自身の死をも意味していることをはっきりと認識しています」とつけくわえている[154]。

このドイツ大使館での会合に先立つ6月8日，フランス人民党執行部は，同党が「今日，東方ではボルシェヴィキの野蛮によって，西方では英米の野蛮によって，かつてなく脅威を受けているヨーロッパ，その文明，その生活原理を守るためにたえず戦ってきた」ことを強調したマニフェストを発表していた。そして，「あらゆる不測の事態に備えて，わが国が取り返しのつかない不幸にあわないようにし，わが国を名誉と尊厳の道に戻すために，われわれの偉大な党のメンバーたちと一丸となるよう，みずからの責任を自覚するすべてのフランス人に親愛な呼びかけ」をおこない，最後に，フランスと他の「ヨーロッパ諸国」には，「栄光に満ちた勝利への道」が開けていると主張した[155]。

ノルマンディーでのフランス人民党の活動を組織するために，ドリオは「ノルマンディーのための党統括委員会」を設立し，それをアルベール・ブーグラ（党中央委員）に託した。同委員会の活動は，ひとつは，戦闘の被害を受けた人びとに食糧・物資の補給や輸送を救援することであった。従軍記者としてノルマンディーの戦場に何日も滞在したドリオは，すさまじい戦闘シーンを目撃し，罹災した人びとのあいだに英米軍にたいする恨みが広がっていることに気づいた。しかし，統括委員会の活動の第1の目的は，前線の背後でレジスタンスの活動と戦うことであった。また，パラシュートで降下した英米のスパイを摘発し，連合国軍の後方で破壊工作をおこなうための，対スパイ活動の小隊が組織された。その小隊には250人ほどの工作員が参加したが，その3分の1が女性だった。ドリオは，ドイツ軍とともに戦う「ノルマンディー義勇軍」を組織して，1,000人の男子を3週間派遣すると請け合っていたが，しかし，やっと200人しか集められず，その多くが16歳から18歳までの青年であった。これらの青年たちの多くが，ノルマンディーの地で，骨肉相食む戦闘で命を落としたのであった[156]。

この1944年6月から7月にかけての数週間，ドリオはデアやその他の対独協力派の人物たちの多くと会っている。かれらは大きな危険の迫りくるのを目前にして，すくなくとも一時的な

154) *Archives Nationales*, W Ⅲ 357, bordereau 6080, pièce 13, télégramme d'Abetz à Ribbentrop, le 13 juin 1944.

155) V. Barthélemy, *op. cit.*, pp. 399-400.

156) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Beugras et dossier Dautun, exposé du commissaire du gouvernement; *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 336, dossier《PPF, rapports divers》, rapport du 15 juin 1944, note du 24 juillet 1944 et dossier《PPF Rapports d'ensemble》, rapport du 8 août 1944; Saint-Paulien, *op. cit.*, p. 439 sq.; J.-P. Brunet, *op. cit.*, p. 458.

相互の接近の必要を自覚していた。こうして，ドリオは（当時ノルマンディーにいたので），ヴィクトル・バルテレミーに，党首ドリオの名において，対独協力派の人物たちの「政治情勢についての共同宣言」に署名させた。この「宣言」は，プラトン提督とドミニック・ソルデ（1937 年に設立された通信社アンテール・フランスの主宰者）との提唱によって召集された集まりにおいて起草されたものであり，署名を集めるために多数の個人的接触を経たのち，7 月 9 日，プラトン提督によってペタンに手渡された。「宣言」は行政当局の無力，「フランス国家に属する諸機関の崩壊」，無政府状態の進行を告発していた。そして，「宣言」の署名者たちは，政府をパリに戻すこと，「文句のつけようのない人物を入閣させることによって」，政府を拡大すること――それはだれよりもドリオのためにほかならなかった――，「内戦をそそのかしたり，ヨーロッパにおけるフランスの地位を危険にさらしたりするすべての人物にたいして，死刑を含む厳しい処罰」を科すことなどの，いくつかの「きわめて重要な行動」を政府に要求していた。ラヴァルに忠実な態度をとりつづけていたダルナンを除いて，対独協力組織の重要人物たち全員が「宣言」に署名していた。ド・ブリノンとともに，アベル・ボナール，ジャン・ビシュロンヌ，マルセル・デアの 3 人の閣僚も署名していた[157]。

しかしながら，ドリオは，いずれ軍事情勢が好転すると信じていた。東部戦線から帰国したあと，かれはナチス・ドイツのパラティナおよび旧ロレーヌ大管区長官ビュルケルと知り合いになったが，ビュルケルは，フランス人民党の保護者を自任し，リッベントロープとヒムラーにたいして同党の立場を熱心に擁護し，ドリオの親しい友人になった。ヴィクトル・バルテレミーが語るところによると，かれは，1944 年 8 月 6 日，メッツ近くのビュルケルの夏の別荘で数日を過していた――この間，ビュルケルはドイツの大管区長官全員の会議に出席するために留守にしていたらしい――ドリオに呼び出され，そのとき，ドリオから，かれが内相兼任の首相になる内閣を――机上で――組閣するのを手伝ってほしいと頼まれて，当惑したという。ドリオは，バルテレミーに，あとはヒトラーひとりを説き伏せるだけでよく，ビュルケルがヒトラーの同意をとりつけてくれるだろうとのべたという。戦況の逆転については，ドイツが恐るべき破壊能力の新型爆弾の製造を完成させるのも間近いという，ビュルケルの語った情報を真に受けて，ドリオは頑なにそれを信じていた。こうして，ノルマンディーでドイツ軍が退却しはじめたときも，ドリオとバルテレミーは，ヒトラーに提出して判断をあおぐ閣僚名簿（首相兼内相ジャック・ドリオ，治安担当長官ジョゼフ・ダルナン，外相ブノワ・メシャンまたはフェルナン・ド・ブリノン，労相兼経済財政相マルセル・デア，国防省プラトン提督またはブリドゥー将軍，宣伝情報相ジャン・フォサーティ，青年相ロジェ・ヴォークラン，食糧補給相フランソワ・シャセーニュまたはアンリ・バルベ）を作成するために，真夜中まで，馬鹿げた夢の一夜を過ごしていたのである[158]。

さらに，ドリオはパリで他の対独協力派のリーダーたちと協議を続け，アメリカ軍と自由フランス軍によるパリ占領の前夜には，8 月 12 日の『ジュ・シュイ・パルトゥー』紙[159]の

157) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Barbé; V. Barthélemy, *op. cit.*, pp. 405 - 408.

158) V. Barthélemy, *ibid.*, pp. 412 - 414.

159)『ジュ・シュイ・パルトゥー』紙は，歴史家ピエール・ガクソットをリーダーとし，クロード・ジャンテ，リュシアン・ルバテ，ピエール・アントワーヌ・クーストー，ロベール・ブラジャック（1937 年 6 月に編集主幹）などを編集スタッフとして，1930 年 11 月 29 日に，アルテーム・ファイヤール書店によって創刊された。同紙は，急速にイタリア，ドイツの独裁体制にたいする共感を表明するようになり，1930 年代後半には，フランス流ファシズムの知的るつぼのひとつとなった。同紙の「危険な」姿勢に恐れを抱いたファイヤール書店が，1936 年 6 月の人民戦線

最後の号に掲載されることになるピエール・アントワーヌ・クーストーとの長いインタヴューをおこなっていた。のちにクーストーは，ドリオの身体からは「最大のペシミストも勇気を取り戻すであろうような力強さの印象」が漂っていたといっている。インタヴューのなかで，ドリオはクーストーに「現代では，行動こそが秩序の唯一の要因です。革命的な政府がその模範を示そうと決意するだけで，大多数のフランス人は，即座に，その政府をわが国の伝統の最善の擁護者として認め，すぐさま，それを受け入れることでしょう」と主張している[160)]。こうして，フランス人民党の忠実な党員たちが，かれらのドイツの保護者たちとともに，連合国軍の前進から逃れるために東方へ逃亡しようとしていた，まさにその瞬間にも，ドリオは驚くべき幻想能力を見せたのである。しかし，やがてドリオを容赦なくその非業の最後へと運んでいったのは，歴史の冷厳な現実であった。

8月初めには，戦況は日ましに悪化し，パリは連合国軍の射程距離内にはいった。フランス人民党は跡を残さずパリから姿を消す準備をし，党員証はすべて破棄された。党指導部は，危険にさらされたフランス南部の党員たちにスペインかイタリアに逃れるよう勧め，北部と中部のフランス人民党専従職員たちは，パリ，ついでナンシーで合流せよとの命令を受けた。8月10日には，『国民解放』紙の最後の号が出た。パリに集まったフランス人民党の幹部たちは，あわただしく，その1週間後に東方へ出発するための準備に追われた。その間，ドイツ国家保安本部の命令下に置かれたドイツ防諜隊の援助をえて，フランス人民党の幹部や党員たちを運ぶ輸送隊が組織された。その最初の宿営地は，ロレーヌ地方の中心都市ナンシーであった[161)]。

の勝利後まもなく，その発行停止を決意したため，ブラジャックたちは外国の出資者に援助を求め，そのひとり，アルゼンチン出身のシャルル・レスカが経営を引き受けた。
1939年の第2次世界大戦の開戦によって執筆者の大部分は動員されて散り散りになり，同紙の発行も停止された。ドイツ軍の捕虜となったブラジャックは1941年4月に釈放され，同紙は，1941年2月7日以後，ふたたび発行されはじめた。戦前の若きファシストたちの編集チームは，ナチス・ドイツにたいしていくらか慎重な態度をとっていたが，再発行以後は，対独協力だけが，唯一，まずフランス，ついで全ヨーロッパで，『ジュ・シュイ・パルトゥー』紙の夢を勝利させることができると考え，対独協力の大義を支持した。同紙の最後の号の発行は，1944年8月のことであった。同紙は，その極端な言説にもかかわらず，とりわけ才覚にあふれた戦闘的な編集チームの協力の結果，当時の出版界ではきわめてユニークな地位を占めた。
『ジュ・シュイ・パルトゥー』紙にかんする参考文献としては，Pierre-Marie Dioudonnat, *Je suis partout 1930-1944. Les maurassiens devant la tentation fasciste*, La Table Ronde, Paris, 1973があり，また，邦語文献としては，南祐三「1930年代フランス極右新聞『ジュ・スイ・パルトゥ』の対ドイツ観」早稲田大学西洋史研究会『西洋史論叢』第27号，2005年12月，pp.27-40; 南祐三「ピエール・ガクソットと極右週刊紙『ジュ・スイ・パルトゥ』の分岐点」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第52輯，2006年度, pp.41-48がある。

160) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Cousteau, transcription de l'article de *Je suis partout* et transcription de sa chronique radiodiffusée à《Radio-Patrie》du 22 mars 1945.

161) D. Wolf, *op. cit.*, pp.394-395, 平瀬・吉田訳, p.381.

Parti populaire français sous le gouvernement de Vichy 1942-1944. 2

Yukiharu Takeoka

Entre le 4 avril et le 15 mai 1942, Jacques Doriot, chef du parti populaire français, a fait sa grande tournée de discours dans dix-huit villes de la zone occupée. Durant cette campagne, il commença à faire miroiter les perspectives du pouvoir aux militants. De la base au sommet, le parti fut pris de fièvre du pouvoir qui semblait être à portée de la main. Le IV^{e} congrès du PPF, nommé《Congrès du pouvoir》s'ouvrit les 4-8 novembre 1942. Le 7 novembre, dans le discours de clôture, Doriot s'écria:《Je veux faire un parti totalitaire! Je veux faire un parti fasciste!》

Le matin du 8 novembre, on apprit le débarquement des forces anglo-américaines en Afrique du Nord. Le rapport de force commençait à se retourner sur le plan mondial, avec l'occupation de l'Afrique du Nord par les Alliés et l'arrêt des armées allemandes devant Stalingrad. Mais, Doriot avait dépassé le point de non retour.

Le 2 février 1943 où l'armée allemande capitulait à Stalingrad, Doriot demanda à la Wehrmacht de lui permettre de repartir sur le front de l'Est et il repartit le 25 mars. L'influnce du chef du PPF sur les légionnaires des volontaires français restait très forte et, avec la LVF, il continuait de disposer d'un instrument qui lui ouvriait la route du pouvoir.

Son séjour sur le front de l'Est dura jusqu'à la fin du février 1944. Au début de janvier 1944, un remaniement ministériel à Vichy fut effectué. Mais c'était très partiel et l'équipe remaniée ne comprenait aucun des proches de Doriot. Le 25 février 1944 il revint à Paris.

A son retour en France, Doriot a été obligé, à la demande du gauleiter Sauckel, d'organiser les Groupes d'Action pour la Justice sociale (GAJS) avec les membres de son parti en vue du recrutement de la main-d'œuvre française pour l'Allemagne. Les GAJS tendaient à faire constituer par le PPF une sorte de police supplétive destinée à donner la chasse aux jeunes français réfractaires au Service du Travail Obligatoire (STO).

Au commencement d'août 1944, la situation militaire s'aggrava de jour en jour. Paris se trouva ainsi à portée des troupes alliées. Le 17 août 1944 les dirigeants du PPF réunis à Paris se préparèrent à partir pour l'Est.

Classification JEL: N44
Mots-clés: Congrès du pouvoir, Groupes d'Action pour la Justice sociale, occupation de l'Afrique du Nord par les Alliés